源氏物語評釋

夕顔

四

第四帖

夕顔 評釋

奮注 こゝもとも堅の弁なり以哥弁詞為巻名 同文かの白くさけるをあん夕顔とも
付るとあり 白ハ白あてふそもとゝ見る白露のひかりそへくるゆゑあるかの白花 月かゝく
こゝて拙れらこゝもとめるあてられ小侯のぐみつるふ此夕ぐゝ あどけり

釈 弁の巻此巻ハ六条院光のぐゝめまいるゲごとしもひくかゝるゝあづむべゝ侯さで年末
光のまより六條院光までのゝと同じ此の巻ハ夕顔の巻ハ夕顔の巻ハ夕顔

帝本巻より抜きたる本の末を結びたるものなれとも本ふかやうのくだくだしきすハ
なりけるを本ふかやうのくだくだしきすハそくといふてうハかの帝本此段の法をむすび
たる物語とそこふ事〳〵くいへるがごとし葵上のの巻玉鬘のの巻などおわりとせしたる八上下
の半は稚のおしとわりたるをとせるのこふてさして論なし〳〵さまでこきとくそ線の要
きこふまたるをもたぐ先おくべし〳〵

○此巻ハなかぐ〳〵の院北へんぐ多の段を主としてかたるものなる故ふ夕顔の半ばをも始
より終までいとあや〳〵くやしうためづらしうなるさ法ふさうなきれとも夕顔ばかりのふ
いたる物のつぐるなりんとやうなりうて於ぐさると出えでめるより所〳〵ふ魅物ものさ
狐まく変化(ヘンカ)ものの法を挿こまさあやし〳〵という法を眼目としてあやあさまさるなのど
いとちら〳〵ひりてめでらくはさてをりさまバ文づくをもてこハうとおくまぎ〳〵ちく
かの限ふかる不まで八さ物ぐおあるぬさ法あるを夕顔上のうせて後右近よめ〳〵せてさ記
こぶ〳〵ふひ合さる〳〵やうに書物どりまど〳〵るいと〳〵めでしさまどひすりふあや〳〵くす
うすれん〳〵れる友ふやあほうたいぬとでめくあるのかの惟光げきう法ふひゆづる
半ぐ〳〵れきハやうよまるまぬすもと奏(ソウ)こと春田亟鞠ぶ郷(ナ)る六條ち息所の紀年(シダイ)れ於ありぬ
こと鈴木朗が咎めるるずぬじんの新を加て八忽海氏君とち〳〵るべきの又舊注ふもいそれ
る夕顔の巻をのせるあ物ふふ夕顔ふるハ夕顔上のおんどうに抱くちする年上出ていふ物八
ぐ〳〵ふよりのるみどすぐくあどく〳〵しくあざやうあ〳〵ぐそまで中ふもいぐ〳〵の法は変
化のるの八月十六夜ふ御夕ふめ〳〵るのけうとうくあの
ゆそ〳〵〳〵ふ〳〵き月新のるとゝて八いさ〳〵ふ以あく中也べ〳〵さる八月の新八いさ〳〵う
あまさて〳〵る所ふてかつる風れ物すぐさを添ふうとも半ぐ〳〵さばうはいぬものあれば

さまさバ粉今すう〳〵ふく〳〵まるのよぐろ北半とき〳〵れ〳〵ばといとはうとゝ〳〵れおぐ中八
なくかいるでのひんんまやはう〳〵ん案ふふこまさハ舊注ふ引まてる江流物の河ふ流ふく
京極ふ息所を融公の霊れおびやう〳〵る古物語をちゝゝゝひくかまてるがかゝ入交
ふもあ〳〵さめまで粉半ぐ〳〵のゝ〳〵さハあるぬゝちぐするさまど今ちゝかる半を
あぐわいぐ〳〵ゝそんそはまりふゝちぐ〳〵きゝまぐまでもひていめべき半るハあ〳〵ぐ
半ぐそのゝぐわれいみぐ北をのゝめでゝつぐる所

○み條の右れぐぐりいとめでしさて奏(ソウ)首ふもいつり〳〵ぐゝく夕顔上ハ浮船君ふ右恋し
賞へる出ざ多ふうされバこのみ条の右ハ東屋奏ある三條の右ふ賞へる〳〵東屋巻る
いゝく〳〵ふやうの方たぐ西とゝひゝくちひされ京まゝけゝりゝ夕三条ゝりゝふざれぐく
るるがまぐ法くりさ〳〵る所あまぐでちぐ〳〵きまつ〳〵ひも半であんまくるゝ〳〵又云
〳〵びのやぐり三条の(マヽ)ハつ〳〵ぐふて夜のそふもいふせ北ゝちするにいや〳〵きあぐまおしする
ものどとぐりのゝ出入あぐゝ北ふるべきお裁の北もあ〳〵ゝ又いゝくゝ北ふるあう
あけあるゝちするふちるあどハなうで物ふぢちゝさ所ふれいどれるゝ名〳〵ていふ
とうせもちるぬなのわをゝて於むまゝくゆくあどで中ゆるかやうのおぐ〳〵けふ北れば物
いゝぐ北ゝるのゝ〳〵わわのやうあるぐりゝとき〳〵北ゝあもかゝるよあ北のまゝ中ゆまゝうひ
あふぬゝちふをうゝくもゝくりゝ九月ふもゝゝる法ゝゝくふハ十三百ありゝりゝゝく
とあるあぐを引合せくゝりみべ〳〵ぶり〳〵くみ条の八月十あ夜ふ三条の九月十三百をもゝく
ゝる言ざ多あるふ正月を車ふゝ北のせて物ふゝたゝるに物ゝゝる北ぐもいとよゝく北ゝうさて又
浮船君の月をあげんとゝて物ふけぐ〳〵半てくいざあひ中〳〵れゝるもゝ半ゝの行ぐ〳〵の信北

ヘンケ
変化ハ対へる相あり右近といふ女房の名を同じき歌ふ仮名書きるあるべし
せんとてとぶらひ接へ〜まこるものハ仮りうゝ行ふこふのあをんてまるべし
○へんぐ名のごとりハ光そのもゆとある所あるこバめでたくすいあもさ〜あれどおほいと
やう〜びさる文の詞ゆて書きこへおく無すぐくもくし〜きさ歌をおくまでふわ〜きこる
いといみじともいみじといふべしすべて仮り無徳いきるあもは仮りおさるべき歌あれバへんぐ名
のさあもいと地ごろく〜きはのかちをあ〜りいでまこそのなやゝびの詠びふハ観音の佛
力あどこ引出くこそ尾をとてのへ出のごゝ〜げ大きこのなりひある伝さ〜ふさるこうじる
年の詠をあ〜ハさびさぐ一ゆのすぐれたる〜きをとうあつめる変の中ふをとげ
なる女の詞〜それる年のこ伝かまてるいそんこるくめぐ〜〜くめでしちこうして
中年れすぐをいひあて中所ち皆〜ぐこあるれふこうあ〜ふまこるさ歌ふすこうすめ
らまこるあどのこととろをいとよく中ひさと〜まこんふもこひとて仏老のざえ
のほどかへ仮ぐもいみじくすこうこう大きこ今の世あも出こるあゝ〜仏徳ぐもくこの
年のすぐ伝をんくいひあて中げだ皆かるこあれ年あるどおりこる浮歌老のげどこれぬ
るぐこうあ〜ハ対ふこるむ〜てこまこうとこていみじ仏年どもいとをこうりをこふいあ
をれ思〜てこんるべ〜さて氏夕彩上も浮無老もあすゆふふ大ど仏思てこ方ぐるふあ〜こで
よりに人あるこ〜ふこるへんぐ名どもあもふまどこれこるあるべ〜詞のうへふこるるのどあ
ハんてあどもさるこ〜くかあこうとに中ゆるどもいとをメ〜ふをつけくこんるべきこ

六条ものこうあれ老びあるに
細六条院ハ皇系ひるもちめて出
ゆこう帝ハ美ふ老びくめゆくこ
まぐ天ハあまこるけりぬべ〜きど
とこる山信より出こう 釈 細流の
院のごとく帝ハ光の源氏の
さて仏ゆ院のこうハこ中ちめて
伏線のさ〜後あ〜うこれど未ぐ
誰ともちこれ光ハ後ふこれ光あ
次〜ゆもを後をゆめう〜ぐ
狂かこ〜を て美光ふいこて若話
の心方あるよ後をこうこてこる
光ぐ〜ひ妙あこうも妙あるこゆの
光の八上ゆもこう狂下よいぐし
大武のめれと 院源氏のめれと
皇子の例ゆ〜ハ三人こうぐき礼祝
まつ〜ゆ〜ハ三人こうぐ〜下の詞
よこうむ人あきこけるゆこうゆう
〜うどくのすこう大武のこ山きゆ
た光のめれとこてあり未指ゆ光
ゆこ〜こう
六条院ハ三人ある系 釈 こうこう三字
俗語より出る美ゆゆよりて加つ
推光 新 大武のめれとの子あゝ加
ゆ源氏の光今のゆ〜て生ぐはゆ

○夕うか

六條ゆ〜うれ
源氏君
内裏
まうでゆふなるやどりよ。大武れ光のとれいこ
乳母
くるぐ〜ひくあゆのふなりよこるとぶ〜もん
中宿 乳母 今訪
とく。ゆ條ゆ〜ゆ〜ゆこうある家〜ぐよておいこう。
幾つゆ人ゆをバこうるべ
仏車いぐ〜ゆ門をけこうこれバ。くく
命面
性光めさせくゆまこを落ひるるどゆ。ゆつこげ
ウチ ミヤクルシヤイ
待 召
ゆるゆほぢのさ海後ゆこうこまんるゆ。ゆ家ゆ
ミタ 大 路 乳母 家
のこうこうふ。ゆぐ仏といゆれあこしこうて。
檜垣 間 新
上 半 部 ホド
かみハさぐとみ四めこんぐこうあげこうて。
白 涼
蘆 湖夕彩の家れ光ゆ光ゆ光ゆ光ゆ光ゆ光ゆ光ゆ
さぐれあぐこもいとこうこうすぐ〜げあるゆ。ちこ
顔 透 影 調
〜仏こうこのすこうげ。あこうこんてのぐく。

八氏紙文鏑といふ

ちぢとみ　新　鄙ハ一間を隔てさぐべく紙ふくるを巻おくを半巻ハ下の方を根ねてうあて半巻ハ上の巻のこひしたぐるやうにくるをいふ巻ハ巻のおふを座をうてく半巻にしてはうる料とうされバ二階めきてうるにおくべ一ふを内ふ立てあるくハくけるにやうく外より見ゆるあのうえ

庇車もいとうやつーもて

[illegible]　[illegible]代車ハおよの乗びあるにの比とのの[illegible]代車ハ女おぐものくものあるをこバ[illegible]ものくもふーもてうそ常用もるくに伝て路次うてくな料してれおぐもるに

さんもおりぬ花バ　新　三位日上の人ハ巻されおする〻枝冊ゆ太にふさ花あどゆう　湖　鶯鶯ゆて往来のくをさぐめいうーむるくれハ巻びちあれさ花をも退ぞちぬ〻かどそーとゆのやくふるを

釈　門ハ郭のやうある伝押ぬさといふるるやさ　八上ゆてあげてゆくるア[illegible]のあるべ一細流ふをうア[illegible]

巻ちちさあふのんふあつうくゆひやふぬあれ
物見シテ立サワガサマシ　下　方
ぐちふあけさうにたちぢさるぬいうあるのつど
タ　セイ　集
へるなーんとやうかたちくおぐさるぬ車と
在　様
いくうやたーのつうぬさたもおぐせ行ぬぐ誰
チガルクシ　前　駈
とうちあんとうちとけまひくぐすくーさのぐた
行へまぐぬかどハたとうのやうあるをちーあけさ
門　部　イもフル　車物見ミヨ　押　開
る。ハいまのあぐくおぐうれをすぬひとぬ
見コえ　間
されふいぐうさーてとやもけーあせバぬれ
うてなもおのぐ半なりぬきうあぬうあふ
臺　メク
いとまやうなるかづーれうちよげふもひて
葛　憂
まるふぬうさたぐおのまひとうたくのまゆ
已　燭　咲　眉

とあるぐいうあぐさうを巻おくを半巻ハ上へつう上べく紙ふくるを巻おくを半巻ハ下の方を根ねてうあて半巻ハ上の巻のこひしたぐるやうにくるをいふ巻ハ巻のおふを座をうてく半巻にしてはうる料とうされバ二階めきてうるにおくべ一ふを内ふ立てあるくハくけるにやうく外より見ゆるあのうえ

釈　おぐおくく間おくのきとかようぬくうあるうらぬさあふのやうあるを

いぐうさーてと　細　夜中ハぐうさーて我おーんあるにとまるをぐをと出ぐむる　鏡　古今集雑下

おのうてうあも　細　伝せんよおのうて

あもやへむぐうえ〜ん出ふうちうて行あ　鏡　此ふ[illegible]世者とむぐうあ紙

うるくに白ぐえ〜んあふうをうえ〜

釈　うのそハ何ぬうさーて我拾ぬ

んとやいあぐバ紙ちうあにうるもも

ふの墓も国ゆうとうふさうて本来

毎東西何處有東北あどいふ仏教語の義

をふあぬうりとゆるあるあるとふ

後ちんをつぐべ一

きちうぐうろりの　釈　きりうゆハ

賢の本ふきうろゆをうて横ふ板を

間　隨　身　獨
ひうあうる。おちううんうよおまうにとゆとわ
言　御　跪　羽
ぐちゆうふをみぐるぐんにいあて。かれ白くさゆる
根　垣　根　サクロシゲ　拾遺　日本紀
をなんタぐにゆうとゆ結る。花のうて人めさてかう
シナ　垣　根
ゆ。ゆ。ゆ。

いでたくうちまゆくちうきあうぎのいさう
（隨身）　白　扇
さぐ〜くるくるふたくまふおたくまゐ〜をとうぐも
（出ヒ）　置　サシアゲ　校
なさけあげなるもをとくとうせこまだ。
晴　ク
ものあけて惟光のあたれいでたるてまう
門　開
を。惟光祠
鑰
ものをおこまどり待りてぬとふびんあるわぎ
置　ワスレ　不便
なりやよくあやえんをくべたんも待るぬ
ワカチ　分
わうりあまでどうぐばうきあくぢにうちおた
フチモトイ　大路
まりてとかいこまりやてひさいまてあるまふ。
（恐タキ二寄ル）　（寄ル）オコロワリラ　阿　著梨　（車ヲ）　下
これうぐいのあぐりむこれみるはのうこむす
婚　三　河　守
めあどわうつどひうるほどうてかくれうほ
来　集　ヒリフニ　ヌリフニ　涼
うるおうこびをまさあたる米よかこまあた。
再　アリガタガル

ともあたるさまふてうあたるとい
俗云ふちうとも云ふとうさ
このあけうぐふ　細云ふ門
公務のやうあるをあけうとひ
しくとく　釈このハかのとうべきを
いろ後の初くさて上あると押上ると
してハこの注ふふふびられも敵
ざれうやうこ戸ハふ　釈かあたた
ふあぐ〜ふすぐふ戸にハもれてくあう
さあくやう戸ハ公ハあり戸ハ門よ
戸ハ内の戸口とかも
枝もあさけのぶあるたを
玉夕釈の枝ハ夢中ちあかどれそび
ふ〜〜ふ地あき〜バをよう〜でふハ
なうふくうぐさかぐふ山蔡ふすふ
てなきとうあ
かどあけてう〜　細地ハ化
を亜ふ〜ふ〜ふべにるをいとう
ふ惟光門をあけて寄ふ〜ふ
なる〜ふうの出ぶるをいそれぬ
ふあるふや　釈山伝よろ〜
惟光があふのあぐう　細釈氏要覧
菩提変糧論云阿遮梨友薩言行
南山抄云能糾正弟子行故

尼君もおたあぐりくさげあたなれどす
（尼君ハ）　大貳乳母之　惜　剣
てぐ〜〜ふひまくつ〜とハ者ぐかくたまつる
ちぶ〜ひ上後ぎらるとのかさう待らなん
（源三）　変　御前
米をうちうふひまの人生ものちひ〜ぐい
ザ　ネンニ　猶　豫　甲
むとれたうふ〜ふうみぐうてあんかくわうう
験　難　（義方之）
おたうまくをあまく待りぬまバ〜ぬ〜ぬ〜なんなうぐ
ホトケ　乙　コソ
仏のたひうもんぐうくまくれ待るべきあど
弥陀ノ来迎ナリ　スワハリ上心ヨク　待
ゆうてよううげまなくうあうう　平　愈
あたうう〜ぬやたうびあげきわうつふかく
ア　アンシンニ
ぬをたあう〜さあふかの〜ぬへだいとあうま
ふ〜ちうをう〜ちんゆ待ぐてあ〜てあ〜ちく
ニ　ネ　ニ　ザ　下ダ　位　高

あども兄(ヱキ)あり　さてこうこの九あれば上ふも。
さりあく　障礙　すまき　後ハめこのせんすこ　今モ　うみ
のこるこ　ぞろ　ぞこ　ぞこ　ぞこ　ぞこ　ぞこ　ぞこ　ぞこ　ぞこ　ぞこ　ぞこ　ぞこ　ぞこ　ぞこ　ぞこ　ぞこ
けるまふ。ぬくふ　ロクデモナイ主人ヲサヘノ意ク　ふあるぞぶふめよとなどやうの思ヒ
ふべきを。あさ　キニスル人　ふ　乳母　ミツスグ　見成　ふまにみるもよをま　今居
していとおめ　面　起　ナジミ　ぞさひつのこまつり
ぞん　玉ホシガルモ大切ヨ　ぞ　ぞ　ぞ

バ世ノ人ハ人ノ心ヲ乱キテウツシヒガメラウ例ノ作
俗ノ語トシテモ拙ナリ拙ナリ 玉 カクマデヨフスレルノハ源氏ノ
ノ乳母トアルコトハ如何ナル業ゾトイフ
事モアラレウ 評 尼君ノ筆キ
ヤウヲトリヒロメテモノヲヒキヲトフ
ヤウニテ書キヤレタルトイフ柳揚ハ
ヤウヒテイトメデタシ 鮎 紙燭ノ紙束トモ
ヨメリ和名抄云紙燭雑題有紙燭詩紙
燭俗謂之曾玖明抄云ヒトツヒトツ
ウチフリヨモヤレヤクレバ
ウツリ香 新 ウツリガトイフテ
ノウツリ香アルベシ
評 サテヨ源ハ尼ゴヒヲ性光出
家ノ安心ニテ入ラフサヒヒガレテ止ル
ヒ ハフ今ハ出テ人ノ ハフサヒ抑
尼君ヲ訪ヒテ ヒ主命ヒヲ
ヨリテ ヒノ ヒ主トヨリ尼君ノ
方容ヒヨリ ヒ法ヒヒメデタシ
ヒ ヒテ 玉 源氏君ヒヒ
ノフミヒヒテ今ヒヒヒヒ光モ
ヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ

尼君ヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ

ものゝ人のえつ[illegible]ぬやうにんとゝ[illegible]さ[illegible]
ぞその[illegible]ぐ[illegible]人あ[illegible]ゝ[illegible]ぢ[illegible]ゝ[illegible]ぐ[illegible]ふ[illegible]ぬ[illegible]く
いへるゝ。と[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ

拾 六条ノ宮ハいつ所ノ宮ニてそひ
そめあるよ一右ノ月ハそうやう
ふすまぢくとう文まくりかぢ
ぢとりすて後ぐまぢひすくう
ぬしとりすて後ぐまぢひすくう
ぬしとり 玉 拾きこよ何ものてあき
うまそひすくうくとんしうとく
ふいぐられいかのゆ息ものゆ者へ
とんぎーておりまいふうう後れ
百ふくく大武の乳母又ぐぢかぢの
ものの後いるるふゆんぎーのふ
とハいるることあれ 釈 拾きの後
小様よ年入れるぐぢ一作
又まるをとあれるるよし
上ふもいるぐぢくこ後ともあく
出てやくすよゆものふの年と
後ふ知るべくうめあーうる後ぐ
らくよりて出き女とハあくくく
さ後ふかまるうるを付べー
うちうげぬゆいるさあの
釈 ゆやんふのやはををぢめて景
りーうう氏ん後すて景ををつゆ
もうそるくを玉をぐどあるくべし
後おの後ハひぐーくく
あさひのゆすぐく
盃 うぐせうぐ旦雨客らくんぢて

ゆのあひぐをうひてすうも
拾 万年ものう引ものぐと月十二の
宮ものうう又回をふ「おぐーすえ
やくおくをてふせうぐあをけの
すぐさこれバうのもみおを乳
出ぐぐ後ものあるもの
湖 かのう魚のう年を年ものう
ゆ目とまるとあう
これうひぐうあって
細 惟光ハ毎日さみ一ぬべきを病
者ゆうの物急あり
ぐふとうに女どもの 玉 ぐふハ色
づくゆのめうといふへうまう上ふ
さ月のうろあひあう抱ーのあく
あんをこいるをうけてぐふとハい
るをを
まぐーぐうあぢぐぐう
頼 こハ褶ノ褶ハ今義解小枚帯也
いへハ裳の腰ふ又ハもそひあう
る俗をよくふををこハ裳を略て
その枚帯のこうひてをく案記
部ぐううけてとハゆを使る赤ふ
上ものすてめれ下のすてぬ色ぐと
ひうう 細 裳ぐ引けくうハをう

まうーゆーぐぢいとものびくさつ月のゆ後ふひ
よりあのーゆ来テ居ルゆんあるべるまでどそれくとう。
ゆーふ影のうちれくよぐふまうをびとあんやま。
時ーゆ中垣のかいまみーゆうよぐふまうれ女ども
のまれうげみえゆうものびーぐうあぢとぐうう
ひさかけてぐーぐーくゆうあるあり。きのふうまれ
なぐうあくさーうくゆーよ。ぬーかくとてみて
ゆーくんのう容顔ぐそいとよくゆーう。抱ゆるうをひ
ーてゆるくくもものびくあるあくさ泣ぐどなん。
ものくくんえゆる。とをくゆ。えうちをくあひて。
著
ものぐやとおもーくうゆ。ものてゆ重

やまふさ四そ目像中ありとハ見
えぬさまなり〜
きのふ〜月はあるうあく
細西ハあるうあく〜〜〜南むき
の西うげ〜〜べ〜 釈 寒さ上ふくの西
あるあとこれバ性光ゴ氏西隣と
やまふさ〜〜さまバ女の奥ふく居
〜〜を隣ゴの西ようタ日のさ〜
入〜〜光〜く東隣ようあき〜〜〜
よ見〜〜〜さあるべ〜
ふ〜〜〜〜〜〜〜 釈 〜〜〜ハ見ゆ。
〜〜〜〜〜〜〜

とおぐ　さぬ　ぬ　ぬ　

おもひくぃぃもきこゝふこゞるゝゝるべゝ。こゝひ
こゝおもてゝうゝ（今ヒ）さすゞよきこゝておもゝりゝるす（忘）
まこなんゝこゝもぃといゝうひゝあゝぃうゝるべゝこゝふ（憂）
こゝひゝく。ゝるゞべゝこゝをゝゝくゝのゝゝいゝゝゝすゞゝなゝゝ（答）
（然）
しゝくきゝゝゝ。ゝゝゝ

いとかりそめのあまでも源氏君ハ
さうもおぼきあハいるかってとかう
とくこそ〜
あるべくもなる事ハおぼえも
釈 まへつかたこもゝとをぼえて
しの時ハ長谷よりのぼりまどうしの
しるくにあるのぐちふたがりめきあ
ハいるかるくのようあんとおんてこう
とあるまぢかう許してのつるく
其ハいと物を修うあるまでこそ〜
評 いまぐ誰ともあ〜ハさまびとも
やうく〜よりのねんぐはを流も
てかゝれるひとあやくめづし
ひるくひのぐもあげあく
釈 源氏君十七中頃長谷にまうで
この時息所の紀年ま詠あるべふ
ふべ〜
祭のぐげあるべきふ 玉かづき
おとりつるふをつくべ〜よもすぐら
其のぐひけるけぐりあふこけても
祭のかぬかるさを中れぐふを
ちてきんあよしこさふ祭のさ
けるかるくさをつかるくく
そのかられるひても祭さたはふ
あてかのかるおをて〜〜てと

おぼ〜きをてことぐとさ侍ぐくなり。方れいと
ぬかるあ〜さ。いくくてこのかされあひくく。祭のぐげ
あるかる〜さふ。うちなげたつ。出のふを。中おれ
おもと。みかるく格子 ひとまあげくぐんなりおかう
祭へとおぐ〜ぐ。ぐんぐ。ぐんぐ。ぐん

今和の新氏うつくしきをとこ
さていとをしすきはかうつけて
和歌をいとをしすきとつくさく
あさぎわのうら〳〵 釈 うめ歌さの
うら〳〵なるも紫色おもふ花そてハ
世君ちよんをとあうりぬとんなる
といふるてそんあさけわ といよ
さをあくめうら花を上めふ
よりて世君をとこ人ちこと語
おふやけごとこそ
釈 私のけさをぶりて主君の
ぬきふいひあんなふわやけりの
とハいふるあり
さふひとハ 明 源氏のめれ
らきこるよきこ花ちふ女ちなしこ
うく 細同 釈 男とりあんうゝ指
男をとれくう女さふひといそ
んもいで指君ち男のあこと
らあんちふ対文ふつて〳〵て
〳〵ある姿とりあさを
和ぐがをりて有ハを
釈 寺の和尚をおて有ハをて
ふうたとあるおを少ひめる
さまさとうあ〳〵う 懸光のみく
ちてふ打ちをりぶうく

てあるちどちぐど。 繪
うちようくまほ〳〵ぎあり。 ク イ
うちようテイ 二 源氏
うちちんをるくぐ サヘ
なり。 あのなきけきぬぬぐ 涙
よハあハ やハ 休 息
みをるうちうりハ。 ハ 源氏ノ
そふむすめ。 分々
あ〳〵 若
とる持 有 人ハいやしれまて。 奉公
さふハせんどうひよりぬたなりうう。 汎
侍
てさうぬべきはいでのはとれもあつう
ニカルベキ 八 兼 リ
きはあ〳〵きを知をる人れ。 少
おもひ〳〵ハいぐれ形うにそひやへん。 リヤウニ フ
ちとぴて〳〵もおそをぬを。 マナドホナル
よそのべうめり 二 イヤホンニ
のかいまみ ヤウス キノ
拝 光 ト ニ ビ ト
ぐ〳〵か 隠
つまぐ〳〵あるまに。 南 半 部
屋 来
のぐさあどすべうあるふこのさ 主
ヒソカニ出クルト イナベウ
まぐ容貌 カハユラニサウニ
釈 こそうハ中ねふ和とまを
半のちあ〳〵ふ源氏君のめぐれ
を君の人れ歌ぐ〳〵こを書ふ例
の文あり
花のちげよハ行ちを〳〵ふりれぶや
河 古今序 〳〵ぐ知るひぐれ
花のちげふ中をめるぐ〳〵
釈 歌詞をおくして行ぐとるいと
めぐ〳〵〳〵くさハ時〳〵世
あ中くれ打とけて〳〵。
玉 こをこハこの中ねちどが紙君よ
ぐれ月のごと冊ぶ紙よりいあり
釈 筆よまりてさうぬべさつぐの
とりちう中おぐうふあて〳〵て
れ文を結びさるあり
特光ぐあぐうりの 玉 ク 和君
のの八惟光よ位をつけてまりせ
ぬきまを〳〵ふかくいあく俗ちふ惟
光がうけうのといあ同ど
あぐやよ 盃 樽の言れ中ねよ
ぐるゆ〳〵うあるをありハぐ君
まをう 鈴 万葉ニハ木句髪上つん
ちとあう〳〵 拾 万葉ニハ八十い長屋
とりけう中ぬ八ぐるう
あのるれど 釈 なのふんるか

まどくいあさうう
いそがきさし 釈 ちなうら来てし
ちをの思てまづおんなる
新 ふる者おほろ安永晴明ど父よ
ものいふよちこてしいひけうる
あどむうし人をおどあそいお信ふて
ぞ信おをさよ地義おさも成地義
て大和物語ふ西てとあ伴の
人をいうすべてそてふ絆八物の
ぞ中よりどうち紀て見てそ
あどいあるをバものづくり人をさ
わくむ信ちるせるふや 湖師 てそ
とい人をうびうるとそいふ河ろ
下の河ものふ後とこそあり
釈 右近ハ夕私の乳母のむすめあり
新 ろハ一ふ人ふいうまをく他のせ
房ろうも右近よまづあそあをん
よというさそさるハ既ぎおのう
ふハ方をそ山ふよあづうべれだど
ん乳付べ一此あ信ハまをちをこう
信ふえうて考ま八かるうれ
の用ちまで知くるくのくあたし
てくるのろう 釈 ちをちくく
制ちるさのあを極ぎてふ茶
まくといいくる

わるる車の作りをのぞたくぞたくまべのい
トホル 童女
そだきく。近の思てまづおんなる中ね後
急来 先
てこまてよりるうる作ひぬれといへだ。又よろ
コ、トホリ
したおれ出きく。あるうはとてうく物うう。
右近ク アヤカマシ 手接
いそさふきるぞ。いでみんとてもひわるぞうち
ドウシテサウハ ドリヤ
ちぐづつ物ぬみちふてるんかくひ作る。いそだる
メク 路 長屋(八) 急来
ものちぞ。きぬれすてをものよひたうみてよろ
者 衣 棍 ヨロ
ぼひるあつ。まてくぞうよりも物ちあべるまだ。
ツキ 倒 橋 落
いでこのかづくたれ祈てぞ。ちうくもおれられ。
ヤア 葛城 峡 岨 為嘗
とむつづりて物のぞきのくもさあぬあり。思八
ハラタチ、 魚ガサメクトミエタ 阪中おく
出あいう。すぐるふてぞ作多どあくたうし。あふ
直衣 姿 分 某

うちそこぐらあを
湖師 うふ物ちとさる扇下く
いそだくるめの、
ちをさ物ちんてくる者八とるそふ
て物をのル北女房どものさ信ふり
信物ふちをとたくれるうるうし
小様の信ちをふハうあづび
ぐづくの神てそ 新 此橋ハ峡
岨ふあくをさうとうをおりて
ちうぐくのくあぢれる橋を
一歩の間ふうけんと神の祈ひうひ
しをうぐあく物ぬてをさくそ
ぞてふ徒のををものを中繋八をふ
もうぐさう比年金峯山の縁起
よあうとい人と縁起八はる信をあれ
バ一八ずくるあるうぐさ八信
とてをくべ一 釈 手物ちうあち
るまけぐあくいをいるさあふ載
まてく安ぐものの物んるさあをいとよ
く 模一かをこう
あうぐくれぐと 釈 名ぐど出
ぐ紀ふあるをさいをあハ物語信剛
所中おの 釈 こてふ神て既中ものい
へうんをつくべ一
小舎人帝 河 ふ舎人八帝の物名

がくまぐくとうぐへ一ハ頭中将のすあるぎん
甲 ム 舎人童ノ 身 随
そのこぐ。ひりわくハをもんよ。ふいひ作り
小 舎人 童 譜 拙
しぬぐ。ゆもまぐ。生ちくたてその車をぞ見
中将ノ 河
まく。とのひくぬ。ぐくれあをまふわすれ
ざ也人ようとおあかりよるもいとちくまは
寄 惟光河
しぎあるはちくれをんくちくこのけ
想 繋
さうもいとよくちおきて。あるいものこるあ
為 置 案 内私
なくんを作へおきあぐく。生ちぐ。ぞもとちくう
ドウシ 文二
きくぬのあどいよりくれ。ぬ作のを作るとぞ。
モクタ形
わびまくしてあんちくれをうりけりくいと
トボケ 謀 底下ネ地 ウマ地
よくかくて。ちくぬひくぬちひさくれをども
隠 安ノ 少

[illegible]

[illegible]

[illegible]

あゆびはうるもちうたるまふハはうるハはぐさ
立　歩行　オロソカ
ものなるべしとこれバわゞ馬をバなりてぬと
（惟光カ）　（源ニ）
かゝもつまあるく。けさうしんのいとはゞさあた
繫想　イロゴトシ　ミスボラシイ
足　れんつけらまて作しん時。かゝもある
メイワクニ
べきうれあどうるゝとぶまど。人よもつせ行ぬまて
源　ツラガレト
ふ。かのタゞうれ。ハかゝむびよ。ぎをゝずのどんざうさて
隨　身　案内
顔　一向ニ　人　童
ハかゝむびよ。ぎをゝずのどんざうさて
ぞあく。ぎをゝるゝ。ゝひよるゝたりゆ
ツレテ　（源氏ト）　陪
とそゝるゝりに中陪どうをゞたゝ行ハゞ。ゆ
サヘ　タ負
いとあゆゝ。ゝうんゝぬゝ。ゝちのゝゝて。ゝたつゝひ
大貳乳母ノ家　（源ヨリハ）
ゆ人をゝ人。ゝあゝうゝれゝをゝうゝゞゝせ。ゝ。ゝうゝう
曉　源ノ帰参道ヘ　在所

ゝうのさゆふて八ゝ行ゝ月をめ
つゝのゝふゝいゝゝゝゝ。ゝ必ゝ月をと
ゝれバ忽ゝ氏ゝ元ゝゝ。ゝ。ゝゞきゝす
ゝう。釈。必ゝ氏ハゝゝゝゝ

見てあるべし　さてこれハ物の変化（ヘンケ）とつげてものむべし物とハなんぞ目ハ見てぬかぬ物の影をさしていふ俗ふて万ろず事の怪をハやがて鬼字をモノと訓ス物怪（モノケ）化物（バケモノ）ハ物ハ同じく大物主（オホモノヌシ）といふ神の四名もさる物の主（ヌシ）ハ事（コト）ハ物（モノ）なること也　史記ハ物字を変化のすがたとあり　評　こゝふもぐめて変化といふすを流出られこう此脉下ハ仏ぐの流れ変化の原ハ出でらかやてむを考ふ物のごとくこうちもていこづふるをひべりむでられ仏像のあられるあふ変化奇事段の脉と注してこゝつさて又新ぐふ物ハ人をかゝるぜてあひ人をかゝとハいとあるまぐ見ぬ事ぐふるといとうく出ぬ見ぐ見ぐ見てさとありゆふ者さ出てる沙ろぬ一のさつれをこゝべしこゝとるうをあ仏ら て後の変化をあゝらさんあの拾遺ありとものべし　これどろうまハあゝん　湖　直ぐの後の人あゝんとも　釈　惟光（ヰミツ）ハ此後ハ

人の子ハ（アンバイ）
きくぬめ（ナク）
ぶるふ（向）
ゆとあゝ
づふいと（コラニ）
おぐて（ワザトガマシウ）
やつまてる（フケイキナ）
とほのこせ（ナットモ）
出入（イデ）
ぐ（イデ）
ぬ（キミワルクヨシナゲニ）
ぬ（グアヒハテタ）

梨（キモノツブレタホド）和（アドケ）
後（一）
若（タツトキ人）
重（コノヤウニニテ）
装（ワザトガマシウ）
束（ヒ）
持（ナ）
衣（ヒ）
顔（ネミツミラセテ）
昔（変）
物（源）
著（テザハリ）

うぐひすぐゝ　釈　此ぐゝの何ハ下のいろあるすゆりといふへ係るさあるをこ関ふ惟光ふあるさ体を挟こそいる例の法こ申しの点のごとしやうぐひす　釈　よのつれけさうとハすぐゝの連ひくるふつれてあるひもるをいく　秘　細　まのひてハさゝゝゝそむくべさやゝゝるは見ぬさまでも自然ふていぐくもゆめて出ぬきぜてく

さひゝゝまあバ　釈　さひハひそよりのもるをいあ詞あり

いづくをそゝりとゝ　新　さゝりハ許量ふ物の度量ふり出ぐる辞ふり　餘　法　摂物ハ保さられあゝらバ見るべ見物をゝうがものいぐこぐゝかぜてやくゝん

ちひまゝ　こりて　拾　おひハ法をちひゝあるくまぐゝりハ法をすぐゝ

あのめさそひあゝつべくハ　湖　さとひやくあゝなゝうゝとも大ゝふちぐされぬべくハとゝへぐておさのハ　釈　へぐて体言

くまこで半れぐゝりよゝあゝん料このすれ（クラキ人）
あのくちい（人）
ひあぐゝ。（出）
が半てそひ（カリニモ）
ありけぐ。（アラビ）
女ぐもあ（多）
なんゝけ（フシギニ）
くまるバ（隠）
ゝん。（今ノ所ハ）
いづくふ（移）
とめバ（行）

（丙）惟光（ヰミツ）シヒテ　ナニゲナク
（丙）惟光（ヰミツ）　大夫　疑　惟光（ヰミツ）
（丁）
（丁）
（丙）惟光（ヰミツ）　オクソコモナウ　ユダンサセテ　コツソリ
（丙）惟光（ヰミツ）　逐　惑　大テイニ

なつ[illegible]ぱ生ぐ[illegible]ものさびかて。
すぎぬべきことぞ。さらに[illegible]すぐてん
とやがさまでぴ。ひとめ成おぼ[illegible]てへぐて物に
のみぐ[illegible]ぐ[illegible]ぱいとものびぐ[illegible]ぐ[illegible]き
まで物もれ[illegible]ぞ。[illegible]られとあ[illegible]て二條院
よむ[illegible]てん。[illegible]りやえありて。びんあるべきこと
なりとも。さるべ[illegible]よ[illegible]てぱ[illegible]ぐんあ[illegible]ぱ。いと
く人に[illegible]とあ[illegible]をいるる[illegible]ふりあり
きんなどぱ[illegible]りーある。いざいとんやさに所よ
てのどに[illegible]ぐ[illegible]ぐ[illegible]ぐ

はんを　をそこもさへもらーまても
んのこうこうのあーんハ長あるのまて
あーんとまでこひろふあり
ひまおかりのいくな　拾　君ゆくく
あまてこるやどのいこまより月のの
わも神ハぬまてこう　六帳
蛙ちくあるあるあるべー
評　此一句下のすどもをひいくまべ
きくまらひるあるが月ゆーくてけんう
あるひいすも　新　日本紀小田家を
あるーどころ万葉ゑ業こーとあく
あるをーまさひとある農業をせ
よといかるく　醍　万葉十八せ分　万
調まつ作ちさと作ちるその奉理
波比をこーく　釈　あるハひを清田きハ
農業ところれこるハかのこさまどで
こハ時くくるまのこさるかくで家業
といかどのまと祭田舎のこちひも
とあるこるかハ小ま人のくとかれ
バあるこひも高貴のこざあるべー
あるのようひも　釈　京ようの思今へ
ゆきてまハすこをいよ伊勢物語ハお
あるこるーひとりて
少女こてきーなや　釈　心深の人を
ゆかせて恋ーふ物語をるまあろ

をうてて　ぽやくふどひくをることもいーえん
ん　ぬあーくーもすこーいうひあこと　いんこてぽハ
きまるべくれとさへおげーそり。八月十五夜こま
あれ月ぐぎゆ　ひゆ　あるいさ屋のこあるあくあり
さくぽんあーひ行ぬきまひのさ海もめづー
来
しーたよ。あ　暁　ーたちくくなりあるなるべ　隣
の家くーあ　夫　ーたさづのをれ　聘　ぬ　目　醒　く。
紗河　あてきいとさもーやこ　寒　ーてこ　今年　ーてなりいひを
ア、　ものむこ　家業　ーたきくれくぬあれかよひも　田舎　ひ
憑　通
うけみだ。ーとんだてこ　へカ　ーてきーあふや
などいひこそもやぬいとあられなるねのぶ
メイく

○タ六八

紫ふきーたぺやとありーを写し
ひぐあるるあ　起　ゆ　世　月年小ーたや
とぷりーを略きてあくく考べ
えんどちくーきどまんハ
細　夕白ハの天狗大せーあるる花を
云あるうちーどちくるくあーバ式
ゑえひを原のみあるえをバるくく
りくくこひてきも入ーたあとと
つーたもうたもこー
釈　或ハ　云こ　ハ今のこあれ
あるこーアを云ハあーたる全作夕
ゆの世をいくこくこといこう移り
ぶー
ゆくこどかやんようハ
釈　清の　あるをこどかやたく
こそんんようハ　あてつけあこ
ようえどるあ年上をいるく
どくくこあ年よりも
圓　天のこくくあくこどくーあ
年もこふけをばきこるのハ
性陸日記ハもこーどり松風の
まくこくこて年どくくこあるこ
かくくこのこ　醍　和名抄祝尚兵
切韻云碓　和名賛良守須云々
釈　女房名云　杵碓　のさく韓雄上

ゆくのひ　世　ワタ　起　ザワヅキ　艶
ちどあたを女いとこづくくこひこ。えんど
ちくこ　アヒダ　キドリ　ブリスル　消　入　ぎ　ぎんハ　ぱきんもいりぬべたすまひ
のさはなあうー。さまどのどこにぱくたも
うたもうこいくさこともこひいきこるさ女　矣　止　十　シリ
なくでどどりてあーたうさはぱいとあてこち　上　ヒン
よこめうくくてまこあくらうどぱきこふ
アドケナク　コノタヘデク　ヤカマシイ
アこのよう　用　意　いあさ代ぱいうあるすこもきこうくこる
ヤウス
さはあくねバぱくくこもちがどやんようは。
ナンナ　カヘッテ　恥
ぱみゆうくくこ　ナ　れてぞんこるぞほくくことなる非
キャウ　サンニ　踏　轟　雷　鳴　柄　碓　ぬこどうたかうす

のやもまてとぐみとおぐやあれみくめしぐほ
とこまてのぐおぐさるぷなふのひぐたともぷいれ
あつびぷいとおやうめぎまりたおとあひとの
こゆすふぷぐくしたとたくおくうぷちろ
樣くへの衣うつまねれおくもかすたこふさ
うたうきまこるこさまぷとこぶめりのこふと
コチ　甲あつめて其のびぐこたとおくうぷちー
近　御　座　遣　端　雁
ちたおまー所ありまをまだやり戸をひき
あけまひくぷともふん中ーうふぷどあた
開　夕食上　間
庭ふざまこるくまと井。お載のおハ。なぞ
シヤレ　イの　吳　ヤハリ
かくるあとおぐどきくめたこりぷむーの
コノヤウナ　如　虫

ハあーびとそれさうこりやあん
評このこうこうふあぐちあるあの
さはをいとおくうにうれさるかふ
師氏のあふれひぐさーもあくせうえ
よりそうれこうはまくのさはをあー
りこうあていとんこうくるあめく
ちろくこのあるつ　畑北斗星前横。
猿雁南樓月下　錄寒衣　餘これハ
朗詠集もんて劉元叔ぐ作なり
釈白梯ハ白き梯のめ也て下形
の者れ衣こせーく有ふくこくふ
わくいくるく
ちぐこれをふざれこれ件
釈ちぐこれハ間のあく梯きくく
ざれる星の件ハありのれあるさ
あるをいふさて旦注ふしまるあハ
くれ件のくのあじあるありりく
ちくくーあるべー
ぐのかのきあくく　花詩七月篇
八月在宇九月在戸十月蟋蟀入我
床下　玉壁の中ふあくハ屋の内ふ
きバ石近さくくあるふそれぐふ
るきをふすあくひうつハ殿の落く
てかぐもやくまぐくれなく物ふよ
出ぐどハ猿をさあふ居ふあくきど

りのあくも耳ふぐーあてーぷう
ふあをくはぐれく
さはうくてはぐさくくも　湖師一行くふ
はりくあぐれく　畑志の切あるあく
ぷれあせくまくこのあくてくあくを
花白きあくせのきねふうくきのう
うぐくををくくべー　細世のうー
きくくあう
ああくぐくーと　釈拙ひくくあ
くくきの物くくくあげあくくく
きくくのきのぐくげふぐやくく
きをくぐくーくハくくく
くぐくくくる　玉俗ふ乳のあくと
いふくてくゆう
世せのくーあぬ者ろ　釈世せのく
あーぐ未来までの変をくくて
ちちくくたひませのくくくのあ念慈
のくくあり下の注勤をハ如ん拾採
あくくくもくべー
右近をあーふぐ　評上ふんを
のあくくくまぐ無をあくとのくくて
くくくくくくをくめーのぐくくとあるいく
くくくーくれぐあくとうぐーあくくく
世のくくの乳母のくあるくーハ選ふ
下まるくくうくくを付てくるべー

ちくあぐくみぐりぐハくく。かぐの中れきりぐ
壁　蟋蟀
ちぐにまぐふゆあくひ拾へるれみくふ。ぷ
リヘ　間　遠　ナレ
あくくるやくくになくぐくるくをぷくく
ムメツラシク　カヘツテ
さはくくくぬぐはくくくぷくくくくーひくう
ムタ負ハ　ムヨリ元　免
のあくくくーくぬぐよくぐ拾くくくくる
ムタ負ハ　ムヨリ元　免
なくくくーくくくくくぷくくくくくくな
ン　白　拾　ヤ
よくくあくくくくくくくくくくくくくくぬぐ
ハラカ　重
くくくくくくくくくくくくくくく

らうくしくこもりぬ（カハユラシウ）
そへくしぶと（添）（ヨヲ引）
こもりくしくゆびさすまで（マダモ）（保計）
ものもうたれ所よこうやそくてあらさんぐく（サア）（夜ヲ）
てのこいとこるこうきわどのあくばいこで（バカリ）（キウクツナリ）（ダヲ引）（ドウシテ）
うふくろあくんといとおいこうていひくね（セイキフ）（居）（ジンジヤウニ）
きこのんまふふうちこくるんぐへあどあやしく（アテニサセ）（公夕負ノ）
やうこうこうてよあまこくるくともゆがこうへばく（様）（男ナ）
（並々女ヒ）
人けやもこんあ所もこうこぐうりゆいぐたをを（身）（隨）（悍）
めくあくぐあどんをめさせあひくぐ車（令召）

こもこ
ぐくもきあびくこあくふこ
（釈）公ゆめきこあくふて行法しぬこ
づくこのけゆここあくこあくふこ
所のこくひさくぐげあくこ行法
ゑ拜礼の度あくてえて八所くく
ちこくあるこ
あくこのこくこ
ねよこのあこあくねをこくこ八公ふ
こいひあくくこ
ゆもこくここの年ゆ
王八過去釈迦現在観音當来弥勒あり法勒の出世氏附地ふもく
ぐ氏金をちりあつ仏く仍てこ乃
指をふ法勒を礼もる乳弥勒釈迦の附属をうけく一生補ゆの菩
薩とも身一減劫のこめふ下生
しゆひて成佛して孔雀之樹下ふ
て三会の暁に説法のつ不富来
導師とつく王けれするをふて
こうけさこびでふ初ゆくこと
法ひびこくこ出名を唱をけゆて
来世をを行ることを初ゆこふをあれ
（釈）當来八未来とつこの同じ琴作
ハみこびく仏こ法勒仏のゆく

こいまこせゆこのあるくくもかるはむ（女房クチ）
ぎーのゆこうゆ（ソリヤク）ぬをんまこまびゆゆ（オボツカナキ）
あぐくここのここうけゆえくこうけ（明）
うなりふこきこ（雞）ぐこのあこくこここで
みこけさここ（精）（進）ゆあくんこゆこあびる（トシヨリメキ）
（御嶽）
こまこぬこづくこゆあるこきこちゆのここひこ（突）（起）（居）（イキヅカヒ）（堪）
ぐこげふおここ（行）
ふここあくぬこあこまここよこあくこの家（朝）
ふこぬこをこなふをむこぼる牙のいこ（異）（ハカナキ）ニ
ゆこふこゆこ（ユアニ）（南無）（當来）（貪）（イのナニ）（導師）（祈）
願
こどこをぐむあるこかこきくくのここのこをこのこ（拜）（海記）（アレ）（バカリ）
こゆゆこはぐここここあこきこぐこ行法ひこく
（ミタケ行者モ）

うまれかはりてこの世とのゝハ
釈 當来於弥陀仏といふを中ゆく
この世のゝハ執行者もゝ
ゝ来世ゝゝ
その来世ゝゝ
ゝゝとゝゝ
なり上ふこの世のゝ
のゝゝゝゝ
ゝゝゝ

河 ゝゝゝハ俗
ゝゝ仏ゝゝ
の一ゝ涅槃経云善男善女受三帰
依是則名為優婆塞 釈 ゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ

河 ゝゝゝハ俗
ゝゝ

河 七月七日長生殿夜半無人私
語時在天願作比翼鳥在地願
為連理枝長恨哥 湖師 玄宗と楊貴
妃の契ハ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ

ゝゝゝゝ
河 從釈尊入滅至慈尊出世佛
五十七倶低六十百十歲云々弥勒下
生經ハ 釈 ゝ勒出世の
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ

の行ふ女たちぞ〜ひく。

夕

山のそれかもちゝでゆく月いうさのてら

やるるんぞうがてくれとくぬの

おそうげやゆ

おそうしうさぐげふ

妻

ひされバかのさつどへる

集有

ままきまろのさとの月ふとらくまぶ女もやまて〜ふらべくれバ（釈）いさよ月やまらあらくんぞ〜ひをあり月ハ遅ぎてやすひとあるひ〜ハ遅ぎてかくまぶ〜ぶとうあるべしさうでハ遅ぎてのそば

ひくまと侍まて　巴　佛蔵をらん悪相く　抄　ぬるべきぬ表めさてみるふや（釈）安ぎとらさぶけしまのくまて有の孤れどをさまぞハあ〜ぶるべ〜

あるがの浦　河　河原院於六條坊門万里小路坊門南万里小路東彼院左大臣融公旧宅也又号六條院後宇多院御領也（釈）准擬をらで右ごとくあ〜めどをべて名をかてくぐあまの俗とらへまぐ〜ぐ夕部のあちろ紀ひとりの俗とらへてあるべ〜源氏君のれ列表めをさる所あ

あまてる門のあのぶまをぶろて（釈）あまてる院のあるまぶ侍ぶ

こぐ〜ハ本の枝ぶくまてくく〜ぶをく（評）おく〜よろしあてきまる変化の脈つひを必院を侍ってあのすぐ紀げ

しぶをまろあ〜ハ〜ろう変化第三の孫あり

きちもあくあるをさ　（評）この以下ハ簡ぶかまきてろ〜ぶいとあやるく　湖　ぶまぐ〜の〜さ侍ろべ〜

まぐらやう〜あるるを　抄　まぐらやうあるまをもまをハあ〜ぶをまをもく〜ぶぐ〜あるこ〜ふもあるるるあと

いあ何ようぶへつぶけていすくもるくくのまぐふるとるるくまてまひ

くるるとのまをあをのまぐひるうとらあるや

いすくもるく　新　ぬあ〜ぬ侍ぶ小女をぬすく必あぐ〜てかるるぐ〜きのきをふくくくるく（釈）いすくへのく

も君の侍ぶハかるのぐくまやまぐひあるぶるくあ君ハまぐかるものあぐるの侍ハちぐ〜ぐるのきくまをよるぐ

けてをるるあ〜ひるあ〜ひるあ〜ひ

のかりそめひさうるく
おきあぐ川と　河　万葉あかね
のおきあぐ川ハさゝぬとも見ぬ
かさらやまつ見めやハ　釈　息長
川のゝ拾遺よ妻ー近江国坂田
郡まある川ありう
いといとくあれてゝ
評　院中のゝ紀をあゝらうゝ
変化ゆ四の脉　釈　さるぐとゝあ裁
の為紀さゆゝ　あぐちゝハゝゝハ
内ゝうゆゝさゝゝゝ上ゝゝハ門
おのさゆゝ妻ーとゝめべし
ゝとふゝゝゝ　釈　ゝゝとあゝ
ゝゝいとゝゝゝゝ
秋のゆゝゝゝ　盃　里ハあれて人ハ
ふゝふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
秋の紀ゝゝゝ
けゝとく　河　氣疎　盃　人げゝとげ
形ゝゝ
玉　ゝゝゝハゝゝゝゝゝゝゝゝ
河ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

いみどくけいめいてあゝくゝゝゝゝこのは　経　管　イヤナレ
みゝさゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

かれ。さわともおふおども。我れをバ人ゆゑ
鬼
てんとのこまつぼたてあくかくしのくまで。女
のいとせと云へまでだ。ぐふらぐらわゆてへぐ
顔 ダダ 隠 イヒヲバレバ ツレナシ 隅
てあんも。こゝぬ幸ゆよ。ぐひこわとおぶして。
カクバカリ相馴テナリ 違
心 保 ゆゑふひもくゝにハむほこれてうわよ
緑
ん。こうよてありられ。ゆのひりやいふ
とのゆくバ。ちりあふんおこきく。
タ負
ひうわりとゆ。ゆ部のうハゆハこてられ
ウハベト云意ヲ含メタリ 黄 昏
見ゾコナヒ
ゆぐ。こゆるめなわうゆ。とほのこいふ。をこと
カスカナ声ニテ オモシロイ
ナルホド 源
所ぐこゆ。ぐふ折とけゆこるさ陶せふあく。
忌々 孫乃 イツ
こまいてゆこゆ。ゆまで人えゆふ。ゆき

うけていつり
ゆぐ。こゆまゆてこう。 釈 かくゆまこ
ゆてこるゆぐ。こふて。ハゆるゆのすが
こゆつりりこゆじていゆくこさま
でふゆて。ゆてこゆまゆて。ハゆゆゆのゆ
ふてゆけゆのゆゆふゆつここゆふゆて
ゆこゆゆゆまゆてこゆゆてゆこゆゆ。ゆゆ
ハゆゆゆこゆゆこゆゆこゆゆこゆゆ。ゆゆ

[illegible]

(釈)ずあんかるーたりうちの茎
らんと申ーどうるゝ　湖　神より惟光
白がいとうくうゝ
がひとりてさぶ拍ものもぐきめ
をとりかあり
たとゝへうくもづるゝ
(細)あずゞ一度のこをひやゝべし
(評)院中のクゞれのゝたをあゝ
ゝ変化等亡の脉く中おとうよ
くひるもゝをゝこんつる拍とと
ゝ尾こ拍ひあるさゝ
さてやりくふれやゝまゞひて
けうとく拍さゞくりゆくさまい
んうくゝ

(釈)クゞえ
ハタゞゝ初てゆのまゆ　めゞうくん
ゆるをいゝこんゝうゝてとゝまバ

(義太方)ゆゝうさよゝおどめぶゝうゝぞゝひをる。たと居イハ
ゝ(ニカタナク)へゝあゝくゝ(静)ゝびゝうゝる。ゆゝべの言をゝゞめ行ひ
て。(奥)ゝゝのゝうゝハくゝらゝうゝものむゝつゝと女の言ひ(闇イハ)
ゝれバ。ゝゝれゝぞゝれをあゝげくゝてひゝふゝのゝう。(簾)(上)(ネコロビ)
ゝゞんゝをんゝはゝて。女をゝるゝあゝさゝを。
(義太方)ゝひのゝうふゝあゝ。(フシギナ)ゝゝちハゝあゝゝ。よゝう
づれゝあゞゝ(原ノカタチノメデタキニヨリテ万ノ歎ヲ忘レタル)ゝゞ日ゝすゝまゝくゝ。すゝゝうゝちゝとけゆく
ゝゝさゝいゝとゝらゝゝゝゝつゝとゝゝゝゝふゝてゝひ(カハユラシ)(ヒレト)(副)
ゝゝゝて。おゝをいゝとゝおゝてゝゝゝとゝひゝるゝさゝ。
(暮)ゝゝゝて。(幼)ゝゝゝんゝゞゝる。ゝゝゝ(キンノドクナ)。(格子)ゝゝゝとゝく。(ハヤク)(下)ゝゝゝゝひゝく。
(御殿)ゝゝゝゝ

釈人の中よりのおさるまあんさを
をどりあくといくるくがむまもく
まりてくのつぞてをおさてとあを
あーはさ叙を恨くまるく
うちふいくよのーあまりん
評ものまくおまをあるやく院中の
そーをふ法氏ともやりくうーぐ
あくをひありまひて幸のほうき
をかくくくー旦六条とりれるぞと
をひ出のふるぞふぞもあるべき人情
まそんのくを画くを画きるがごと
うーくくらとんもるーう
釈なーくの不ようのひありたすれ
バ六条とりふうくみりくもきの
いくふむありうとのさて
まづりひぜくのよ
釈をひの下よ出とあじうちてる
あるべ必べきまあれバ父試品補ふ
ばるもあれさ一向ひをう
釈法氏とタ新とさ一向ひとりを
あり 拾 此あまさ院ふくーびて
法見不のあきりんふくんもく
ーたすでるをとりすてるれ
とく 釈 とすまそやとぞとあり
ーくそでをなやるるべー

らづみふいとを上をうしげ旨ナゲある居女みくぷ已おのづいと
ん人でくーとんをるをびぷづひもおあいさで。
かくてとるるとあ人をあておらーてぷ。ナシデモナイ李チョウ
あうーおるあていとめぞまりくつーるまとて。アイーシシンダイニ
あのほうるとーれ人をぷたおとさんとんとん傍資撥起妻三
まびぷ。およおてくくくちーてぷるたあへ魔サメ
ゆみ。およおてくくくちーてぷるたあへ
たちをひきあたてうちあたあひくだをを太刀拔置アヤニクニミナナーキミワルルクー
おこーおふこれもおたそーとこひるさ後
ゆくくものあんーあるとのある人御旁寄直宿
おうーて。おてくさくくくまのれといへとのる紙燭起火ヲサスシ

よひするるどふすくーねいうまるふ 評此清さくめぞくーー変化身八の脉あるるくふいりて絶ひて
変化を弱ーおされくるまぞひいくあづくくく 釈はすぐくありまきくきて男恋も女恋
ものぞあーくきをれまくをれけぎくくと、弱さびーてすくー稀いりまくるの中よりー出ーれくる
あくるるつゆバくわも遠間あきくれぞぬあくよくー味くあべー
いををくげある女ゆく 釈諸法ふこまきを六条市息所の怨念あるべく注をーまてるハ引あてのひぞくく
そのまーハ脈弱ふ委ーくまるるぞくーくぞいとあやくーくをくーげある女の居くくくのくぞふべーぴ院よ
きあくくんを変化のまあくあるまを野るさあく
かくくくあるまあれ人を 玉 くくふすぞまくくるあもあれ人をく 釈あてあくくくハ率てはれ人をのひてく
くれはさんとをとんまと 釈ちくさくくくあるタ新恋を接起さんとするさあふ恋ふれ後ふ
ものよおをくくくくもくー ふまふ院よいくり上ふ恋といそびくて絶ふれまくまバといくくふさん
まくるさをくめておぞくーくるまふれいとめぞくー
必もきくふあくー 評上のおくくあぞくーくまをくて変化身九の脉
太刀をくーぬをれく 釈太刀をぬをて松よよあのふ 評此清さくめぞくーくまをくて変化身九の脉
ゆくくあるくとのあ人おくくて 釈ゆくくあふ法身ふ法ふ法ふ法

まんだ。（左を羽）いうでうよかんん。（間）うてとうへである（俗言）（オソロ）
（若々）きをはへで。ぶ。ぶびこのうてうるてえ。いとうと
（響）（答）
まっ。ぷ。人もてえんやつけぐく。ぬ。ぬぶこの女ぬ
（ト并ベ）（夕負）
いみ。ぐく。わ。の。（戦）きさ。ぐ。ひて。ぷ。ぷ。ぷ。ぶきん
（懐）（ドノヤウニ）
とと。ぷ。ぷ。あ。せ。ぷ。ぷ。ぷ

きんとけくいあるものゝ。惟光の朝臣はきたりつ。
キヲユルシテ 寐 来
つんいと。とゝ。せもの。べださつ。ひつまで。おほ。
今カゲセヒ 問 彩の子河 侍 仰
せごとなし。ゆつ。つゆふ出むかへよ。ゆゑ。
言 暁 迎
べさよ。ゆてあんまで。ゆりぬる。とゆも。
退出
あのかゝゆて。ものの。ぱゝたごちなりきまバ。
如此 瀧口
ゆぞるいとつきぐ。くうちなゝして。火。
弓弦 二ツカハシウ 打 鳴 イホ
あゆゝとゝ。ぱゝ。あごうわぐざ。しのうへ。
危 イヒナガラ 曹子 ヘヤ 対 面方
いぬなゝ。ゆ。をわぐゆて。なぐいめんて。
イル 名
すぐぬん。潮はのとよねまし。今て。ぜと。
過 直宿 奏
ゆ。ちゝゆ。ぱゝ。ぱゝ。ぱゝ。ぱゝ。ぱゝ。
更
かへゆいゝく。ぱゝ。ぱゝ。ぱゝ。ぱゝ。ぱゝ。
今ハ昔 探 モトノマヽニ

（釈）変化第十二段の脈
けゆゝ。ゝ。ゝ。（潮）ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ひゝ。ゝ。ゝ。ゝ。（丙）右近を引起す。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
（潮）ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
（釈）ものゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
（潮）ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
（釈）

わらびるる人ぶてぷのよ宇どてれぬるあ。
幼　魔物
ときんうさなの仏ちちぶ行ぷ。ちちくりて糸
シカタノ十　紙燭
まちぷたちもうごべたさほめもあ〜ねど。
頼子子　動
ちたはれ性をひきよせて。あはめてよゐれ
近　俗河　イダモ　イキカシ
とのぷまいあ〜ぬことふく。甲おまへちちも
ツネ
えあ〜ぬ性く〜まぶ。乙長げ〜めるえのび
押　上
らびあほりてこや。とちふちさびひてこて。
保河　持　来ヨ　所　辞退　モセメ
とくあ〜よをくんすくばぷごこのまてう
召　寄　タ負ノ　挽
ゲみぷ。蓋よ月んてつるちち〜る女あ。ゲ
モト
よんてあとまきこんうせめむ〜めのごち
ナヤヅト　消　失
あどふてて。かるるのハきげ。といとめづふ
珍　奇

湖 たとえばいさえのうども源氏の
ふもあきれのあく 釈 あるて
〜さハあるて〜ちるもあく
いてとあせよ 湖 惟光ふてあ
くまのれと云ばくくんをつらせと
湖 ふのさまあ頃く
あふげ〜のあざり
釈 惟光ゞ兄の伯耆殿と上よ見
えくくふげ〜ハ俗のあをいふ
平あるをかく〜とうえそこぶ抜す
ると惟光のやどまる平よあ〜ば
とりのさく大武乳母のあるべし
きてこれハよのあく〜あをてて
かるうのこれのり〜きのふハあ〜
すべれといるあをそは書て加
持あどとさせんうあく
あるるるどめきうんこ〜
釈 かくあるこ〜に半の中尼
見のどそんあまでつみるさ俗
ふかまてるいと委〜いとめでヒ
むくく〜さ
釈 春ほ考ふむくハむくつき
を畧〜て主いるくあざやる
るを畧〜てあざくといると同ど
俗考く 釈 畧〜てとるハいでく

むくつけそれ。イセ先ど。まづこの人いそ夕貧ふありぬるで。
キミワル
とおあほまて。乙さるどぎふ。対れうへもちまき
今多
まるびそひあ。副卧ひあてやことれどろう行へど。
コヤク
エヲヒエ
びそるよひえいうくぷきはとく抱さて
息　ハヤク
むそり。いそんうれ。丙ゆのあくいるとい
言
ひあまきあふべ人もあ。丙そうしなどをとて
鯛　法師
ハ。かるうれきのあり行ものふハあ行さべけ
方
きづ。甲ざて我ん づよ ぐうあくど。ぷとり行ちち
サウ　ゲバリ　若
ようくいあうひあくなあぬる成月てまふふ。
今良心　死タルコト
遣　方イと　伯何　抱　吾　君　生
やるうとあくて。つといぐ行てあ。きみいさ
ヒシト
出　カナシキ
いでるへいみど行めるんをまひて。とのあへど。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

形容の辞もりさくこそハ尼もうるる
とあるをもきれりとそべし必ち
ちのたにまさこそたことい山住のまれば
尼ぬるとうかさこそるるく
おのあーわとひしくと
拾 万葉集ちぶふこの序のひーとも
まで為がさつるも 釈 これハひ
とつやの歌ばくさくおのるるひ
ひーとふくるしてくーくの方ろう
ようるくちるハむくつけたるれ
ぐるりもそいくるびーたまをを出
ぞてるる
くーくるるるるこちに
餘 朗云 ||のるきるるるるるる
らんるるる花ひとぶ心ひやくる
とくまるーくんとおびに
釈 かのくるびーくむくるるたに
けて惟光を行るのるまるるる
さもあるべー
ちるるるすぐるんくちーるか
釈 怪指遣 分るまハ山業を見る分
ちーてまるまるるのべーるるる
ぬるるるるをおるひてめれるるる
ぬーくるるとバこのちるハ代のさ
あり此月ケ手紙とるるハひぐるる

なるるるるも。ふくろのハこるきるやとわるぼや。
鳴 鳥 今ラヒ 湖人 今モ
ほん うちおもひめぐーるるるるるけどく
くるとまーるるふ人あるるびおぐてかくるる
時 ハス 今モ 今モ ドウシテ
あるるるどるるるるるるるるるやーるるる
やーんるるるなー。右近ハめのもみがるるぐて。
今右近ヲ
君るるるるるるるるるるるるるるるるるる
ヒタト ヒツキ 戦慄 死
るるるるるるるるるるるるるるるるるる
ドウナラウ 空 今右近ヲ
るるるるるるるるるるるるるるるるるる
カレコイ フシベツ
源氏
るるるるるるるるるるるるるるるるるる
スル カスカ ピカくシテ
るるるるるるるるるるるるるるるるるる
母屋 サカヒ 上
るるるるるるるるるるるるるるるるるる
懐々 今ニヤラ 足音
るるるるるるるるるるるるるるるるるる

るるるるるるるるるるるるるるるるるる
釈 るるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるる
評 このるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるる

めされんこと成さでめて。人のそひいそんす。
世ノヒト
よろこぬ中童そのこちずさびよなりぬ
号
べにあめうのくくをとこ侍たる名を
タワケガマシキ
とるだらさられとおがーえんだもてからう
ヤウ〳〵ノ
じて惟光の和尚まゐまてよみうたりう
夜中 暁
きといそんばひよちこるのこよひし
順 今夜ニカギ
をちぶーとでめーかさんおうてつるを。
リテ 侍 召 ニデ 息
おくとおもほそのうめいまてのさ
贈 六 召 入
まひ出んことのたのんおたふふとおといそれ
ハリアヒナキニ ナヨトニ
ばんば右近とのあのくそひきくふたでせん
惟光 乗ノ山 最 初
よわれとうちそひ出ーれてなくば。君もえ
遊

くらうとおぼえ
ものおぼえもをまあるーあれちて
釈 かーうでぐふ毛平のおうさるあ
四位ふ中庸をりるハーとゆ
ようーあらーゆべのくちずさ
釈 後ろていとやの京童のくちず
さびくおるた伝ありーふこと
あるーくて 細 うきうれたさ
にうくとのくあるとと
からうーじて惟光のあどんあり
解 惟光をゆるーあるハ源氏ちの
あるとこしさ成つるくわんあある
こと上おいくぶどしとこよいうーく
出ーをこるハまーのみくもを飛
きんこあく作者の用さこまをこ
あとのおいを生ーるば
評 ほ氏ちぶさ法おるぶどと
たくこらいのくそひきくまこ
釈 右近これこるの惟光ぐぶりく
をきーてとのね惟光ぐぶりく
源氏ちを二新ちをへるるせとあ
あるぐせーくをこひ出るくさてちの
年どもハ十ようぶーくーちぶきこの
ゆしーつーて異きこるを平ぐのう
ようるくぶるとあ惟光ぐるみ

釈 惟光人のてありたーるを思
出るえとあるハるこーる連べう
えくんるで 釈 侍廊甲山のでと
えくありでどばるあれるすとい
成ちあるを中よそのまはをいるく
氏人ふいきをのべるひてぞ
釈 惟光が高ーくーまようてあるろ
ろたのひてとりあさをかーいるく
評 此語いとーめでーに今までハと
かきひてさうーどりあひーを惟光
ゆ出ーふるこちーてうあきを
ゆがしあきはんの性をあげるが
どーーとばうこいひやくあーう
ひてとらるぐさーあこーう
ぜ侍あぐをてすあれ
釈 或おゆ邪氣を退けんくあふ侍
をこるますくえというえいき
出んあのいりあもあぐー
まのあ山くまうのがりこーう
釈 比叡山のこらふハすぐで比叡山のと
あるこれーてあぐうハ比叡山の侍
あること志ーれーう
あ山て侍あーば 細 夕夷の上ハ
自然りは一連例あぐせーくものを
ろこと

堪 出ーえあるーで 甲 されひとりさうーがりいぐ紀ちち カシコガリ 名取ノ山
まつあるこるふこのくよいさ成のべ 惟光 息 伸 ばひてぐ。
かあ紀ーたことをおぼされるる。 五 ハラノハ いとい。
ーくふもこぐあ紀まふやーあ酒 留 江 豫 ひて。
いとあ。やー紀まれあるば。おさまあと キミノツブレタト
いあるもの餘ありてあんあるかるこるみのう ニハカ
ふそ。おさまこ誦 経 やーなどをこてハすふまこくく。 為
そのことぐもをさせんぐるんおぐも寺てさ 願 立
誦 経ナドヲコ
せんとくく。阿闍梨 ぐりあのをとといひやりつるハ。 今五
とのくまあるきの惟光行 ヨベヨト 山へまりのがりて 今五心
比叡山ノ
ぐいとめづらるあることあも侍る 珍 奇 れ。

おのまもりとあらぬ

釈 源氏ものの位のよをかんがへ歳
ゆて惟光もようやくのぼり位
をもとるべきあり 河 こんかうのく
ようとくくと祭をのこせかう
よくくとうの 新 万葉すりとをる
老古出よりむともとようてあく
時のいつきこ 釈 よくハあく音く
さらくどうく 釈 ゆきのくどいのは
うりうきくに係りきふてうくのくて
かるのめをうふーいきのどうり
うりをは といをさうて位の文法を
むゆ格ふあーも上ふうるるあく
てもいよ何ことあるハひがことく上を受
るるあくてきいくどいいあどくもを
とあるるも 玉鬘 かるくのもとふ
を畧きうるあり
きりーみぬるくて 釈 源ーむハ
なくまふむあいく功光あるるる之
位のはよ位をりてうくへうう
くるんとく 鼎 但槃注云我及春
屬史記樊噲傳大臣詩諸呂須燒
屬索隱曰燒音春 釈 兵数のうく
ひきくて 釈 或抄云山まふ丸人
をあるうふるをれいまぎれんとく

かくまくまくびあーぶけんちのねきせるふと
やはうつんけることもなうつどてあたるよ
さ法いとをうーぎにらうくんちるくも
いとかあーくてのまてもトのくとあんねさいど
年うちねびせ年れとあることもちがく
ぬるくてのをうふーハきみのあーう
うまいづまもくわうたどちゆていたん
うもあれどこの院もあどくふきうせん
ことはいとぜんあるべーこの人ひとりて
むつまーうもあーめ。おのづくあのひうく
しつべさくるむどくもくちまどくまくん。

源氏モ惟光ヲ右近モノ意ニ

そひまうして 釈 惟光のちいく
ゆまるるまあくーいと多くー
むくーえくーー女房の
釈 山河惟光ぞいひくら女のごとく
ゆまれども下文のさはさハあくば故
見知タルと侍ふ尼てゆハ尼ふ
あくうるゆ侍て侍るとふさと
ちのおれかめをるよ侍くーすの
釈 惟光ゆ父の乳母あくーー女の年
よりて尼ありて侍るる
くついぐのて 河 年ふまバるど意
繁もちーけのくつくむまでおい
まるるる後撰 巴 式河青表紙ホ
ありーと云く 新 今昔物語日本十三增
賀法沙のすのゆ條ようる美豆波去
類やてぐあまうのおいれるみくー
げのゆのかあぞうれーきかくと
あまこバ三蕚れともいろく光て歯
のまくーふ落て上のて下のてと三ッ
さー合ひくくあよまうあをいてう
三藥とそていゆ後ハ皆誤あり右
ホも美豆波とてをそれの格位の姫
ゆうあるも同ーうく 釈 新釈の後
もあかいうあーん光河とふうふおと
まぐさくくて年光ゆるさ侍くのく

まづこの尼をいでおくくまーねといふさてこれ
より人ぞくれある取ハいでるあーんとのふ。
ぐふさ我ー侍ーん。かのふるさかハ。女房ゆ
うあーひふくあくぞあ尼まぐこひ侍ーんふ。
ちぐくーー

[illegible]

[illegible]

[illegible]

こゝふ先ゝ〻おのゝ〻おく〻事を
ゆるさるゝせぬまでゝうひやうべ〜
おかいくのまんさもあまく
玉葉 光上さまゝ〻しのふ詞あるべ〜おち
ちさるおゝん 釈 さまもあるべ〜
玉 これすゝ〻ちゝ西方の所位よ
まうまうるこ千ふさ〻べさるよう〜
をゝて奏〜仕〜めとある事おるる
おちちおゝ〻こゝろ〻〻〻
釈 職かふまきまへる赤ふ人を産せ
〜めゝ三せおゝ〻〻屋ゝふもれ
のゝふしこのゝ下ふけゝ〻いあり
のゝまひくまるゝ〻〻もこふさう
あゝ〻まゝゝづまゝバとある事ゝおゝ
〻ゝり
えひゝぐあへで 玉 家内を安きれて
釈 安き一切よいきあへでとある
ゝさうろ〜
おちちゝうて 湖 源氏のゝ宗
よゝそれをゝゝうて目を書て
生ゝ〻ゝ〻ゝるゝ
学つけ仕〜ゝバ 湖 源の学ゝゝぬハ
大ゝのゝふれゝゝはつけゝゝふ様きさ
ゝゝ〻ゝ 釈 大ゝゝおゝれゝゝゝとゝゝハ
ゝゝ〻せぬハせんすゝべおれまゝてあき

こゝもゝ〻〻〻〻ゝふぢゝゝもいゝゝく〻ゝ方もあゝゝき 頭 痛 熱
んちゝ〻ゝていとゝくゝゝくまゝどゝゝれまゝへゝだゝゝかゝくゝゝちゝ 苦 惑乱 ワヅ
なゝゝて。ゝゝまゝもいゝゝづゝ〻ふゝゝゝゝぬゝゝゝゝ

カン沐浴

葬あるはてぃとふびんなることゝ云ひ法へ

ノツガフ

物ソレイリ

ぬ。たんぞぶたやこゝろやゆ〜んが頭

咳　病

てく〜く待きてぞいとむ無礼いとく苦あること

参内セメ　今朝

あどの法ふ中ねちぶさるよりをとて奏〜

夜前　然有

待〜あ。よべもはなてびよ。物ソレオホク　遊　タヅネ

ぬ。をもひくぶれ〈帝〉ぬ。あく待ちたと

ひく。きちうくり。阪中ねの河〈立ガルトテ〉いうるいきぶもしかく

〈細ゆ〉　行　繋

ぬ。のべやゝせ法ふすてぞまこと

陳　真実

ともやひまへらまてひ。といふ。心ひうちたぶれ

法ひく。河かくうるうあてのぞでぞぬ

委細　オモヒガケナキ

けぶ〜ひよふまるよりをそ〜法へ。

繊　類

いとてくるべ〜く待きぞとはまるくの

クワシ　タイラシク　ナニノヘンモナウ

ぬ。ぞんのうちよはいふひあくうれきさ

ことを物ぼをそふぼんちもなやまーそれぞ。

悩　細阪中おの貧〜

人よあとと見あせ法ぞ。義人の辯をめ

チヨツトモアヒダ〜ハズ　湖ゆゆきぶれのよ〜

よをそく。よめやうにかるよりをそうせ

真実　カヤウナワケ

さきを法ふ。大殿あどふもかる事ありて

左大臣

うちぬ法せうそこあど笑ぬふ二日これ

消　息

て惟光よりまちかるそぶ〜ひありとのさ

カヤウナ　繊

よのひく。第る人〜もみるうちあどうまう

立　退

づまぞぱ。人ちげうぞ。よせく。いうぞぶ

惟光　河河　出

かつ尼ぐ〜ひ

今はと見たてつや

湖　のそや護生あ〜ぶとと見そ

ふるうとと

あそ〜とこりう待ぶんも

釈　こりうとはひぶ山の尼ぶ住ま

よ久新の屋をこあておく〜ぶ

ち〜こりうあんも伝ぶれば

吟る葬をせんといふ

日ようう〜く待ぶ尼　釈　日ぶ〜

もおあれぶと葬日の吉凶を

いひ〜ぶてのこゝをやあひと

見てさう法傷作ぶの法ぶ尼

とうくの手

釈　とりかくもする葬礼のうく

とかくぶぞぶ尼ぶ〜ぶて法ぶ葬と

いふうをを忌てあべ〜

あひちうて　釈　惟光と相談てく

けさは谷ふもおち入ぬべく

花　左をさうふ〜このあちうふ谷ふ

ぶをもあげんのうく

河　安中のうれぶびどふぶをお

けばぶをぶ尼をもあきこ〜ふり

なんん　古今俳諧

ふるうさとの人よ　湖　右近徒歩

へもいとうをせ生んとそもそ
釈 一本のりごの
てこのまそのそひめごてして
釈 右近ハ生年んとうをとまづ〜く
そひもつれよ年のまゆをよく
ゆまりて生やべーと惟光が
らんおきこうとうのくさるハあるの
まふひひやーバ彼女房ゆの世〜
こもどひ敷ひて伊氏ゆの時ゆか
よくゆくすも世ゆんらこの用さ
ゆべ〜
うーらく 拾喩 日本紀
いうゆるべきゆう
湖 伊命もあやうさとと
あゆうさ〜ふこ〜
釈 今ゆよ伊うさゆぐふこ〜ゆ
ゆふべきこれも伊ゆべき前女の右
国ゆて伊〜ゆというさてさるべき
とハ伊ゆるべき右国とゆるゆると
おゆふ伊ゆ〜さて伊ゆの伊よ
べきの辞脱ゆるゆ〜てもゆゆれど
ゆ〜いうでやゆも語孫の点のごと
人ふもゆ〜さ〜ごとこ〜
釈 伊ゆるを人よゆゆ〜とゆバ惟光
こゆう〜葬のゆをとうて万年を

いまハとんさてつやとのふまに神を出新
末期 竟 ヤ
よゆ〜あて〜あれゆふこまこうもゆくく。
ゆ 哭
今そうぎうふこてハゆ〜伊ゆめ。ゆぐく
とうゆう伊〜んもびんゆれを。あすなん日
今朝 無 フツガフナル 明日
よつ〜く伊まバ。とうくのゆ。とうこふを
葬式ノ事ナリ
老伊のひひ相ちりて伊ゆふ。いひうこ〜ひつけ
載 談 託
伊りぬるとゆメゆ。そひ孫ゆ
副 右近
のゆへで。ゆまんまこ〜えいくまぐう伊る
生
めゆ。ゆれもゆくまぐとまどひ伊りて。ゆさ
後 惑 今朝
ゆ伊ゆふもゆちいうぬべくゆんゆんゆ伊れ。
入サウニ 墜
かれふるさゆのゆ人よ。ゆげやーんとゆせど。
告 ゆ人ノ嘉ク

○卅七

とうまうゆひ伊ゆとうゆを
さうーさ〜ゆそひゆせど
釈 さうーハ然ゆ少そうー辞ゆ
さ〜ふそひゆすとゆさうべきゆふて
万のゆ伊〜めとゆゆをうひてさ
やうゆすハゆ右国でとゆゆひ
ゆせどゆゆゆさ
うひびゆるゆのゆさびゆ
釈 うひびハゆりくーうひーて
うく浮てひよりーたさて俗ゆ
うーくーうゆどゆんゆどとさて
ゆううひうゆのすゆびゆんを
むゆりくゆのーゆうゆひ人のう
どとをゆさんゆがゆたとうひふ
ゆふゆよゆて恨をのゆうこゆて彼
ゆ人のゆどの女房をそゆあてハ
尼ゆをゆどのゆゆゆまゆふうてう
ゆすこう
さ〜ぬ伊ゆひ〜ゆひ〜ゆも〜
釈 ゆれの命ゆゆゆゆもうこと
のゆふをうけてそれハゆ神のゆ
さゆあ〜ぬ葬ゆの伊ゆひ〜ゆど
ゆもこふゆうゆゆとゆふひゆ
〜て伊氏ゆの伊ゆをうてゆぬう
ゆとう〜ひうとゆゆさ伊伊

暫時 鎮 状 廻
ゆ云ヤラン 喩 置
ゆ悩 推光ゆ
今ヲ アラタメテ
ゆ 萬
ゆ漏
ゆ者 フミコンデ
ゆ孫ゆ サウジヤ サウハナニゴトモ
ゆ事 ゆ負 ナグサミ ムナレク
ゆ拙 ゆ負 ウラミ 賀 セツナキ

細惟光々妹

令婦あどもきこすみ。尼君まいてやう
のことあどいさめ禁ゝるをさづゝゝあん
ばやべさとちづめ禁ゝぬかし
ぜゝあどもこれいひあてさはこふ行。
等
とゆるぐかゝるまくる。ほのきく女房など。
ぜゝ
あやゝゝく行るまゝん。けゞゝひのゝの
ぜひく。内ものうるべさくさゝめ
きあどたふと泣のぐあやゝゝぐるさう
ゝ
ゝとあくゝなせとその御れさわ。丙のゝ
まゝどなふゝとぐゝくまべきみも行ゝさで。
とて出とつぶいとゝれゝくゝなぐさるまべん
トイフテ立テユク

惟光朝臣

大弐乳母

惟光朝臣

法師

惟光朝臣

惟光朝臣

法

ぜゝあどもこれ行ゝ他の夜ハ俗聖よ者
つまて法師ハ生ゝ御ものさわゝとて
あくもものせとうゝさ
いとゝのゝくあゞさるれバ
惟光ゞきすくふいひすて真
ゆゝをたまひてゝあゝくあゞさゝ
あゝゝ者のゝゞうとゝひすあゝ
いとゝゝゝゝさ
急くのさ
を持ゞて雅君ゝ者ねふスミナ
とゝるさふ用ひゝとゝゝ
ゝあどゝれゝゝゝ
この比ゝ者ゝもゝへゝゝひゝゝと
てゝゝれゝるゝゝゝふ調ゝゝゝる将衣
をとゝゝあくゝ者ゝゝあゝ假の法
おゝ衆とゝゝ行ゝハゝゝゝ
ゝゝゝゝゝあどゝふ
ゝ者の夜のゝ化のゝふゝゝ行
ひくゝゝゝをんとゝゝゝひゝゝ
ゝれゝゝあゝゝふゝゝへゝゝゝ
ゝどゝゝゝのゝゝゝをんゝ
ゝ
ゝゝゝ
ゝゝゝ
ゝゝ

べーお経の例あり
うーのうど 湖 鴨川あり
ゆさうれたり 孟 ふまうと
ゆ給ゆのうとあど
湖 とうべの葬送の地墓あど
あるべうふまうのあるべ物ものう
うーうるべきを性今のゆうう
仏ものもひれいぬ 釈 尼のあるる
あるのうんを或物ふ今の美山れあさ
まあーんとうとうう二條院より知て
そのまうへ中ちうあるのふ
どうーち給ゆのうもーうあるび
女ひうーあうーあのうして
評 右近をうりせうる例のうくし
うぎうとのあうーうあうを仏
新 大うふあうをうく仏のゆうを
唱あうる成こいとつぶくと唱うを
いうあうーむ一向うを毒ゆあううを
あーじうーいいふくもうーうーで
釈 惟光うのうのびやうふと御へ
ううべうまバうぎうとよーうーうて
新ふあ仏もううあうあり曰注ふ葬
送以前毎言念佛得十五功德あど
いううをいうまうれど新教ゆうれ
うるげどくあうべ

のうーをうんでちぎういつのせうよ。あうし。
うーちゆもうんんとゆげーゆんーてきいろ
惟光 うーいふずあうーじ身んをぐーて出のふぐうちとわく
ゆげーゆ。ナセ月さーいでーかうーのほど
ゆうーうのゆうをゆのうなうーうーうべゆのうう
前駈 なーどうんやうーうるゆうーうーうーうーいうーいーうーうーう

いふさまてのあるのさく

さまとハちゝぬか　釈 源氏見をもの人ハ人をも詩とハちゝぬかと

いふ所よりゝ誰とハちゝぬかやし

とハいふて年ゝのあくれあるあふ

ゝゝ人ゝひあさをもゝるゝ

あゝ死ぬをバさる物おく

玉 あゝ　さゝハいるもさゝゝれ

バそれハそれおくといふさこすゞ

てさるあるまてとふ何ハなきう

くないさられ侍ゝくゞ

湖 右近がもるゞといそんとく

ゝあふふさゞひて　釈 火葬の煙

おさゞひてたをもゝ夕形をもゝひ

ゆんといふを

さるんなを事ハある　玉 事ハと

いふ物ハさゝふ物ゝふをふくゝをひ

うけゞを侍ふあるをやゝのすつひふ

おゞくあるあゝひゞとゝそもく

世ハの源氏ゝの侍ハすべてたとゞ

夕鳥上のをとゝ非業ゞゞとく

まそうゞれふゝをと侍ふふく

あゞくをあゝさめんとてのゝまく

ゝなれバをんをたて解べきく

ゝゝをとといふめの

ゝゝゝの形ゝてをとゝくへてゝ形ゝ今ゝさび

ゝゝをゝをゞふきゝをまへいゝるゝむゝゝの

ゝゝあゝゝんゝゝゞゝのほゝふんをゝしゝて。

あゝれなゝもゝゝゝをゝちゝすゝてゝゝゞゝ

侍ゝゞゝかゝゝゝ

これらうらう　評　上よりふけぬさ
たはまやうつせばうるはせとき
いとどすゝさおぼろ　湖師　さてさ
ゆれとひのわふ〜よいとど　ゆふ
遠方を見ふこうちーうゆく
あゝ〜ゆゝ　釈　夕べの晨れ
生世のまゝゆておふ〜ろうまを
ろひ出すゆく
うちうゝ〜うゝ　玉　まべてうれ
となびひふれ交あるをうひて衣を
おうひ入ゆ　うちうゝ〜まゝくまるくまれば〜ハ
行ふ院ふて夕白ゝとゆ〜ひ〜ろし
時〜ひふまゝ〜ゆ〜ひ源氏君の衣
衣の夕白ゝ死藤の方ふつ見てゆ
まゝ〜ゆてあるを見ゆるくきれ
〜ろうるといふもさ〜ふ見ゆふ
ハあ〜ひ〜ゆのゆゝ〜死藤ふまるを
まて見ゆるやゝふてある
評　このゆゝ〜いとゝうゆゝくゝて
虎狼もあきゝゝべ〜
つゝみの紅とまて　拾　兎捕を捲
の中納言といひ大和物語小無名
妙のつゝみあるゆをとゝうてとあり
所の名あり

らんぞやうゝ〜せ行ひあんとゆゆゆゆまゝバ。ほ顧
見のくきゝれてむゆゆもつとふゝゝゝ塞ゝて生ゆふ。
みちいとゆのくゝきふいとゝ〜ゝきゆ旁ふいゝづこ
とゝあくまゝどゝふゝゝちゝ〜ゆふゝゝ在ゝゝゝゝ
うちふゝゝゝ卧　交ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ紅　衣著ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
なゝゝいゝゝゝゝゝゝゝ宿　緑ゝゝゝゝゝゝ
ゆゆゆゆゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゆゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ

[illegible]

人くみどろ（笑）きさらぎ（止ナコト）ぐられ。このごろ例より（ツネ）
もぞ。ぐづのあれたるものびあるきれうちさきる（頻）
なるふもぞ（イラ）きのあれたそーきのいとあやまう（悩）
（中）
おぼーくわーよハいとでかく（仮モセヌ）歩どりいろた（サダリ）
ぬるあんとあげきあ（実）ぐわ。まくとふぬ（助）まひ（数）
ぬるまーふ。いとーくーぐわまひく。二（苦）
三日ふるぬるぬるふ。むげーよよるるやうみまふ。（向ニ）（弱）
（帝）
四のもきうーえんーおぐくことかぎうなー。
四いのうーふぐくふまるおくのくーるぎうー（方々）（サダ）（桑）
（祈請）
ちーんず（修）（法）ぐわーあどぞいひはくーてべくもあう（薫）
（板）
ぎで。せーよーーぐひなくゆくーれはいわうさは（比類）（デタキ）

なるまだ。せーふなーぐ（長）おそーまれはまだれはや。
とーいんのあ（天）ーれ人のさるだなーう。くーー（泳）（苦）
きはんーちーあ（下）
（御座）
祝あどーいーう。かのあ道をめーようせてーづば（局）
（御座）
ーーちもぞーわだまどくんどぞひのどあてぞのー（騒）（惑）（シヅメ）
人の時ーつをーとーとひーーう後ーりてあー（クヨリ）（リナシ）（ナガサナヒ）
右近
ぎすすはけーはーふーーぞーちいぞーーう。悩（侍）（病ヒ）
（助）
いーりくーおぐーさーう時ーてぞ。めーいぞーーーーつーひあど（右近ヒ）（使）
ーーあんだぞーほどーれくーまどーーらひーつーぞーーう。（交）（着）
服
ぐーいとーーーーーーーてぞーーちあどよーーーーーーーど。（黒）（容）（負）
かーーーふんぞーーーーーーー

〇みじかうかりそめれ　短　慈　ようひろされて。我
もせふえあるものごきなめり。年ごろの〜れ　在　憑
こうしつ　失　ひとくぷんばかりそのうんぷぐさめ　今ツ
ふもぷ　若　あぐ　存　命　へどよろづよさどまんとこ　ヤシナハウ
そうしぐ。ぷどもなくまる〜ぎもつそひぬ　間　義モタ名ハ
ぷどぷぐ　ザ　ちをしくもあるべきさられとものび
やうにのひしく。ぷろげふあるべいのうひ　カニ　ネンニモ　ソヤ　弱　位
あるとて成ばよきてくぷいみどうをもとやもひ　サ　筆キテ　惜
きこゆ。このうちれ人あぷをとそふておも　殿　内　足　空
ひもどふ。ちよりはつうひあのあ〜よりも　惑　内裡　使
ぷふものげし。わぐ　あぐれもそ〜まれをきて　命

とうごうのさのうしまひもそ〜
釈　ものをのぶ新上を年ごろつるをて
つ人〜をなれともろ人を先ひく
さぞん知くろ〜んをおぐきあふ
られす〜あぐ〜べ万年ふたけく
海を書育うしとうひ〜をけ〜ぐ
あるもの名れとせふ死ぬぐくろふく
ちそ〜〜いふさく〜ちてふべきと
とハ火葬の煙ふ〜ちてふべきと云
さをそふきていくく上ふをが雅
ぐひてといくふ同じかく省きて
もちふまるハけ死ぬぶいひあ〜くる
同あるかるべ〜
いくひあ死ものとばきて
釈　回復ふ〜ものの死ものをとばおて
といくハ〜かつられるげふて
ぐさんとのあくをこけてもぐ
むくあ〜ぐさがいあ死ものをばさ
あ死くちのあ〜う保氏ものむる
し〜ふりちハるを惜くふて
いさ〜さあさるへとあるぐり
をあぐりあべ〜
あ〜をそ〜ふて　釈　俗云ふ見を
さう〜ふてといふあうて奉走
ふいとまあ死くく人の俗ぐ持をふ方

〇ものうみ
釈　死織を忌のひ〜も性をく〜ま
日もひくく滿老ふ秋あれと
いさ〜ぐ姫月ふ白の死ふ八月
十ふ日ふ〜ハ九月十ふ日ふ十

ものをのぶ〜ものをのぶ〜ものをのぶ〜ものをのぶ〜
ふ〜ふのふ〜ふのふ〜ふのふ〜ふのふ〜ふのふ〜ふ
あるべ〜　釈　ものをのぶ〜ものをのぶ〜ものをのぶ〜
ものをのぶ〜

七日の昼あべとらう 玉よハ夜
角の四つの角ハ三つ角へ
ゑていつゝ世と云ふるハひとと
ゝ ゝ車うて 玉角ようり絞仕
たたの国車へ 細英上の山方ふと
め玄ゝ

山ばいみあゝ ゝ

評 舅君の恨を見るごくうう
さんうむつゝと云る詩ぶで
ゝ云ハ云ハ源氏君のゝ ゝ
いつゝ

釈 今恨 ゝ
ゝてゝ
あゞ

釈 ゝ新の ゝ
いで ゝ

釈 ゝの ゝ
ゝ

山物のけ

釈 ゝのけとハ
鬼物の氣れ人の ゝ入 ゝ
怪 ゝ ゝ ゝ
他 ゝ ゝ ゝ
ゝ

盃 これハ ゝ ゝ
ゝ ゝ ゝ

潮師 ゝ
ゝ ゝ

あゝぞ（ナリ）ぬ（世）ゝ ゝ ゝ ゝ
ゝ九月（ナガツキ）ゝ ゝ ゝ ゝ
いと（面）ゝ ゝ ゝ ゝ
なゝ（痩）ゝ ゝ ゝ ゝ
ゝ（泣）ゝ ゝ ゝ ゝ
ゝ（怪）ゝ ゝ ゝ ゝ
いで（コヽロシヅカ）ゝ ゝ ゝ ゝ
ゝ ゝ ゝ ゝ
ゝ（イセ）ゝ（ビトヽモ）ゝ（マイ）ゝ ゝ ゝ
ゝ（ホドヽデニ）ゝ ゝ ゝ
ゝ（心）ゝ ゝ ゝ ゝ

さばうそゝを ゝ
玉 ゝ ゝ ゝ
ゝ ゝ ゝ ゝ
ゝ ゝ ゝ ゝ
ゝ

いさめのこの法はきるをもちでぬぎ(タノキ包)むき申おほ
うる勇まるてぞ(ツイナヨソト)れくへふくもぞれぐことをいよ(戯)(言)
ぞこ(タイサウニ)ろせうとうのぞ(メイワクナ)ぞうるさ法分のあり
さぞふなんの法をぞ(フトシタ)れしゆぞ(タ)ぞよう。
あや(フシギ)ぞ(ミ)ぞ(ヤ)ぞ(ヤ)ぞ(ヤ

ざーあるる　はまふかのひーをぞれ
秋の比の（イカ長ミ後）　たの方屋よりいとおそろーき
ことよりぞ　来　ようでこーよ　掛地（オソレ）をわくく
ちぢみよぞんうさおうよぐーおぢ（メツタニ）
てぞ　西　の京にぱめれとのすみ　乳母　往　ある所よ
なんぞひろかに（ヒソカニ）　ひろくまを行へりしそまこもいと見んぐ
ゑーきふ　住　ぞこーまびのひくぞ　移　ぞ田ふうつろひ
あんとおぐーさわをぞとーよわはふさぐう　塞　今年
ふるうーに行うまぐぞとてあ　遠　五条ノ宿　紀
所よ　ちんぞ　ふ　ぞんてのーふされをりぬる
こと。　ちんぞ殿多分　ぐーなぞくめりしぞの人ぞ　似　ぞ掛

ぞ

形見ともあり又頭中将の子を養
上のなまてもあれバなまふつけ
てもかゝ〜ゑバとも釈とぎ母おく
ゞの解ハ小指ままゝ〜へ〜旧流
どもハひゞ〜とゞ〜
そのあ〜んのとあどもゝ
釈そのゝ〜ゝ幼きへ〜つゝそてある乳
母あゞゞもゝ何ゝゝ野ゝ〜ふゝひゝ考
〜そゝゝゝさゝハ源氏さんのゝをこ〜
ゝのゝのあゝ
ゝゝゞ〜〜くあつゝゝ人ゝゝとゝて
湖ゝ自らの方ゝてハゝされゝまつゝゝ
ゝとゝゞつゝ〜人ゝゝゝゝて西ゝゝゝく
ゝ〜ゝゝゝゝ
ゝゞられのゝゞゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
評ゝゝのゝ〜ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
きゝゝゝゝでゝゝ林のゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ二ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝきゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ源氏ゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

とのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ

いうでう世を作らんとす〜ん

釈 世語ものがたり〜〜世まよ〜そこの世
世をそひ世まこバタ日いと世ふ死ぬべき
ものをかくやれあ〜〜人てあるハ
つとめた金しいうでう世つよ死ぬ〜て
世ふあり〜〜ん人とハすん人とひて我
きてるあるべ〜〜もんとある詩を
よく〜味ハふべ〜

いとも人よ 歌 そおとていとも
人ふあまごさ
ねばえ〜き 拾 孟津ふ引きてる扶き
意思のあるて人のをハいとて人
ふれさ〜めとも糸ふのる拾ア〜
あ〜ふを拾とあ〜ふと引きてろ
きでひあるべ〜 釈 いとも〜もくいと
いるるごとく神のあるまでくがて
あるべきをかくを世をあるて糸き
ハ人とあるて拾て悔とふさと
拾てるあげふあ〜ひ人の
釈 あ〜てるのけあるるあのを年来
このり〜きく〜て行このあるこ
ま〜てるるさてあきこのさてきて
あ〜ひてをとふ引ふの白をあ〜ん
しるる頃ふあ〜ひ〜

てるまてば。三位の君れからうさグウ行ひて。かれ
ハ。のうちわさ〜ぶ。やあ〜〜て行ひ〜を忘ひ
いづまバ。いうでうを世を作〜むとをそ〜んいと
しもん人よとくやう〜なん。あそうなげよ
ものの〜ふひ人のけんを。をものあ〜ん人まて。
そ〜ごろ年来あびてるて女をらてうを。かてうを。賢
なびうぬ。とんづきあたるざなりうこづうう
をうぐ〜しく〜すくよう形〜ぬこ〜ふあ〜ひふ。
女をうでやう〜ふく。をわをづ〜てハ人ふ
あおむれめぐをぶ。をすぐにあれば〜みー。

をうあびてうをて
盃 右をどがおの何よ拾をうあげふ
おの〜のひ人とうひ一詞ふ付
て女ハをうあびてうをてうをを
ほの生をの
さんどふ拾ていう〜 玉 玉葉ふと
が男ふハをうひ世上ふ拾ていし
とあるハふどう拾ていみ〜ハすて
のやうをいるるあれば夫ふ射ても
同じ〜〜ん人のふハといるふ。
い〜世上人よ射ていう何ふあ〜も
このうこれはぬこをハ
釈 今このほ氏の伊をう〜方れ
はぬ〜ふハ夕教ハあてをあれぬ世ぬ
のを〜あ〜しとうひをるあもおを
とうひてあく。
やのおくあうてを〜 評 これやく
教のあ〜ふを〜をいあれ三ふも
ぐ〜ぬ〜ぐ〜ぬ〜ぐ〜ぬ〜

ゆ。みくかしげ（ゆ。耳ヤカシ）まうしきあるこのきるとおばし
出るさへ（マデガ）ゑ〜〜てまきふなどにおとち
ざてぬ（誦ジテ）（臥）かへり　かのいよれあのこぎみ（伊与）（小君）
よのなをうきあまでどっとふ（殊）（已前ノヤウ）ゐてやうある
（浦へ）
さいとづてもきのうのうばう（言）（細字除のんく）（ツライ）とおぼしてて（竟）
ものをきくく。ぱちすぐにうちあげたけわと（サウハイフモノ）（煩）
ほくくぐうちあんとをる（遠）（伊与）（下）（ニ）ぬがてすぐにんがて（ナニトナウ）
くまてぐ（モハ）おぼしすきめるうとこうにふ。（忘）（分ニ）
久の詞（御連例ニ）うぜのうちあやむをぐとふいぐ（悩）（言）（出）ハこうて。
ぬをもなどうとくいぐおるよ（ドウカ）（同）（経）

（釈）此詞詠やうのてはいかう伊氏君のをゝこのふとを本様の方ふいひうつてゆるふやむといくる
（孟）ことふぶてハこうてくをゝぬとうへうげくんるべ
とうぬをもうく（細）伊のもやいきよ
をもを本様ハちぐうて向ちゐぬと
伊も又おとくくも言伝おうて徒
ふををひいぐぐうくとく（餘）いう
ぐくうふといくハ五十日をゆくうて
よあるあんうう〜
ますぐ、（河）徒ぬあうのくう〜
うくん君よりもきれてますぐ
のいけうういあん（餘）養送恋四ふ
孟田の徒ハ和風さる手歌ゆあり
（釈）ゐまぐますぐのうくくいくハ
実ふて徒うくくといのうさて上の文北
河の徒のうこて中ゆうさて徒伊氏の
伊ゆのくうをを本様ゆうて文ゐて
くてみくくゐ待べ
めぐ〜〜きふこれも（玉）くくうひ
とすくうゐ白のうまを知ゆんくうあ
なふこれもといふ
いけくうひあんや（釈）案ふ湖月抄
ゐ本ふ秘訣をいうる玉の文よいくる

○ウウウ

いくぐくうくうハ（珍）ひみぐくるく。ゆまをぐハまくと
よなんと（待）ゐくくうめぐ〜〜ふ。ふれも
くを徒ゐすれ行ばいけるうひあんや（空セミ）（補）いろゐ。
出ぐいくまう（ウ）（言）（ハ）（イ）
（誰）（係）うつをみのせちうきゆとちりをを
まくくこくとふかるいのちよちうなくやと
（復）（言）（端）（カリフイキ上ル）
ぬをもあるくくうよみぐまうんのくう。い
（ヒト）（ハレル）（ファ）
とぐういくくぐあり（中陰ん）（乱）ぬけをゆす
（ミホ）（美）（マダ）
まるのハぬ徒いとちくくもをくくもゆひ
くをゆ。かやくうにゆくくうぐをきくくえくうせど。
（オモシロウ）（情）
けぐくくとハくうひよのくぐすぐていくくひな
（氣）（近）（今ト奉ニ）（サウハイフモノ）（ナンデモナイ）

うしなてもなんてなりくやくこのんとそふあり
モノナラストハ　くうレ
そもかのうそうくはあ人のかねをなん
詞　カタノホウノ人ハ
かうふとときくまふあやしやしやふそうふ。
シヤウシヤドヤウニ　デアラウ
とかねのんれうちもいとほうしんぞうこうれ人
文ヨ月　あれたる萩
のそうたもやうくまばかふ。ふ。てそふうつう
キ、タ
そふこそうハそうかりやといひつうん。
イヒ
ちのうふもかとれ萩のをもむすばそそふれ
チラト　デモ
うぐとをなりふうもまし。ちうやうある萩
ヤウゾ　高
ふたけてそのびてとのうまへまでとりあや
トウシテ　ソカニ　ウタヒ　小月ヒ
御フミヲ
まもちくかねるもんつけてられかりそとと思
御フミヲ　源
ひあそせばうりうんつくゆるーてんとやりへ
罪　免

これの源氏をもあさ。例の文あり
うれかねけをうすれのうかねを　細　此ものは平仮のとよみあり
あやーやいふやうーんと　玉　れ仮萩のすてふ男女の交をもとおれのあやーくそへべーとちがれく
さそてきへあそとうのをおれかもふーせそてうらくそ
ばうとも云ーくあふてんばべ　そばあるせう男女のへをもとふ
もてありくで仮のあるかてハやいありもそといやくとゆれもそうく
あるゆをいふ詞まて此女の彼所のをさしてのまてまそて
小掃のごとくにうまてハ此文まいまくはくるあ仮　釈　小掃も補さてあやーやとい詞をおれのあやーくとふさよ
よくうまてくろハそばくりりそさあくばあやーくいふやあ
あーかねをうよりはとまくあーて源氏のあくーやとはもれ
まふくあうとあんハ　玉　くあハはくるとつくいふ詞きくそ
釈　この仮詞まるくーひのひーくもとれ仮萩のもあるもの
れのうあもうく　釈　れのうハふすくとうくんそくとう萩のの
ぬやくふ仮ふのくまてそ仮ふくはばのひくまてのそ
ふのうくみそも仮ふくべきそとうふさてそのそ
あれ仮ふれを源氏くんの詞をとうねをくちうあそて
をさくもうこべきくのうハもようくそふくあるも生おれの
さハいきくれとうあさくどくハいひくさあり
くうやふるくなくつけて　箋　人目をもどうくるよくくようつひ此萩おあくもて　釈　此仮のどくくうきことお
ねふとくまんくてのさくくうれるつけてもうどくハおれの本あるを知るべ
あるうくそれとくひあせどくく　釈　れ仮萩のすてふ男女の交くくうハ源氏くあくくくくくとくひあり世で
くとひ彼所の後あくくもその最ハやくそべくくとくさるハ源氏くあくくくくくと詳くくさ
あくべくさるあくよはふくうくくくくと詳くくさ
おれのあそをふれくをまくハ　釈　源氏くハおれおもんをまくくとひるくくもふ思とう侍くておれの居ぬ時をんをくく
くくくくくくとおのど。　玉　源氏おのつまくのそをくくくくハちりくどと

ぜんおごりぞあいなりける。世將のあるをまうふんすれば。ぜんうーとなり。どかくあげ出
しるもさすがふくぱへうちとるばうる成
かごとふくとて。（小君）
（新拾遺）わのめうに風ふつけても下をだのあるぞ（半）
八重むぐらまむすばるまでに。（自身ニ比フ）（書）てはあげなるを。（悪）
ものぐさうーざれてこそいるきぬ。（書）（ヒシガナイ）
（故伊勢の基行の歌）わうもやまよりほかげーいでる。（顔）うちと
（火影）けでむうひみるる人へ。（向）（居）（手紙）こそみちつまぐれ（竟レヌ）
（貞）（今）はまもまもうれ。（新猿の歌）なふのんぐをありげ（キドリ）
ものく。ざうどれほうりうーよとた（ザワツキ）

うちとけで（玉）これハ手紙のすみてうちとけむーて向ひみるへ
新猿楽のさ詞れ者をおかり出る
ふけげて向ひみるうり手紙のもて
ふとあがーしてろひてーぐすもこ
きを新猿楽のようてハ人ハと
いる何ものぞ（拾）（新）日さ
あるのんぐせ。ものげもあくる
（釈）こうう新猿楽のすくかく二
人のをもむてとうーふいるハ
手紙をようのみ仕へ（新）さう
どけバとあーーとと
あるこのぐすよ（拾）まハ人へ
何とうたもすーてふありすまあーて
とあるもいるすーてと
（河）こうずるふまさもあれ名ハ
こちぬべーー人ふこうーぬせふーまま
へぐ古今集（釈）あを名をあぐれ
とかーーれる侍の手つきふこう
らぐも必ずの何ようあるくこう
ずるふハ名ハ手紙ふ懲ふ
べきふあ不懲ざよく
四十九（釈）ふーくあるかあると
よまれるを拾ふ音ふるむべき

ぐーー出るに（ミヨザル）ーーー

ようしゐるふ行さべ〜おほの仏ゑ
ひとの法華経をこそ
河在止観院西 細本部王記云天
慶六正八藤寛子六中道三七日於
叡山東法華堂修一諷誦云々
さうづくりとりてあてゑ〜
釈法師ゑ布施とる装束ゑりれ
ゆえ然るべきお金銀諸具を省略せ
ぞ沙汰してゑりのゆく経仏のゑ
ざゑ八経巻の軸表帝仏像の荘厳
おどをいふるべ〜
惟光が兄のあざり 釈あるもて
ゑる人まてゑ〜嘆ゑり
文章博士 集文章生の学業
を修ゑて博士ゆかるゑ
新文つゑ〜をのよ 玉補若狭をゑ
てんをゑひくゑ旅ゆてさりぬぐ
えつくゑいふさ〜むべきよ〜仕せう
ゑ〜をいふくゑ下ゑいふぞゆゑりゑ〜ゑく
ゑ〜ゑまそゑるべ〜
ゑみさ仏ゑまゑり 玉 必ず世ゑてゑ〜ゑぞ
あゑ人〜ゑあるを今八極ゑ〜ゑり
てゑ法仏仏を作ゑ〜ゑゑ〜ゑふきえ
ぞぐゑのゑ〜ゑさよ 釈そのゑ〜とゑ八ゑ
ゑまゑ〜ゑ氏ゑのゑ〜ゑまでゑゑゑ八ゑ

よ〜ぷあそれげふかたいでゑ〜ゑまゑ八ゑ書ぐゑ〜ゑく
源三ゆかり 書
なゑぐゑ〜ゑゑ〜ゑゑゑべたと仕ゑ〜ぞゑりとゑゑて。
マ、ニテ 加
ゑのびゑ〜ゑまどゑるゑみぞゑゑゑもゑぞぼゑてぷゑ
コラヘ
ぞ〜ゑれげ〜ゑれぞゑなゑふぐゑゑ〜ゑんゑその人
ゆかなシ上 書士ん タ
とゑ八ゑゑゑゑもゑゑゑく。ゑゑゑゑ〜ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ
世 如此
ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ

善果を得をしめんとの中陰経の説なり 巴 今自の作をふまえ玄ろんとく 釈 六道の中いぞまの原ふさまりて

夕顔の亀ハおりゆくらんとなりけりゆくるし

うれをぞ〜ここの 評 むぐ〜この君ハれもひとちりそ

いくめぐくしかくて後ふらのあんしのみをふかまてるるをもとべしねのつらしあだいふう

あ夕白つのやどりふハ 孟 ゆるのちよハ夕ゆめのうさへ行つんとそつく 釈 ちまよハ源氏君とおのへまくよ

評 夕顔のすハすでふ竟さをもくハ一段をあ〜〜て玉鬘巻の伏案をのこちるくぶりづ〜れそのかふ年月

つ〜ふうまとあるさう〜夕ゆふをはもとすまるとは出をを受徒さる何あることハいかもさら

あう風はめぐこのをこおれよあるくいきくれバくるれとう君の男ふある年で作ケ〜へハのさるると

ある赤ようハ地殷の豚をつ〜ゆるあり又惟光をこちるまバとあるをしよふ惟光をこいらづ〜くぶりうまぶくひあ

ものつ〜もひており〜ふさせてあてをうこうくことあるようこるこの首尾をあのせくはひこうをこをふもいるぬく

源氏君ことの夕顔のあんみちびくハいしらく猫さとざあるあるくよをゆ細をぶくぶさてさぶ惟光のくぶううのふもを

ふるくさるうふこくゆも又ふこうけをもあまこうくこくといひてつひふくぶりうてかこちぶしふ浅通をるること〜〜く

仮りくるり仮りあ〜の用ををあるくをぶさあり 箋 源氏といふのうをたるくハ初るる 孟 さ〜めきく〜ハさゆ〜〜く

さぶうう〜ゆとさ〜めをく〜うバ 湖 源氏へ猫をく〜ハ惟光ある中ふ〜ふをもあ〜んとるくく

られうをとくこちるまでと 湖師 惟光もりくあるよういひ〜〜ふ〜〜ぶれ私のげさうをするくあ〜ぬさ猫を

ふをんさあるさくるバ

り〜をゆゆ〜のうぶもゆ 細 自然の仮のうれるぶ夕顔をとうて源中ふちぶ惟うこ玉へみてうるうるぶ

評 この年ゆるうるさゆ〜ふまでとふ為をふ大丈性をゆれべき猫をあ〜ハをるなるべ〜この系あ〜ぶぶ

ちくこるハ乳母のむすめぶ揚名介の妻ハ嬬女と一人ハ侍くるふ仮てのゆうをふ玉鬘巻ふをて

めれとのむすめ 細 揚名介の妻ハ嬬女と一人ハ侍くるふ仮てのゆうをふ玉鬘巻ふをて

三人とのみハあるて 湖 めのとれ子と 釈 鬘巻をそのとさ〜〜ふ〜ハめのとれむすめをいつるごくゆうをうる

ば乳母のむすめれ揚名介の妻の子と三人あるとうゆ〜ハ侍めれとのみう考ふべ〜

うるうんハことと人あるくるもハ 細 あるいのがごくるをハ別のめのとのみるう

ヨ君のくをぶよえきうぶるう

評 これハ玉鬘巻ふ初の西の系よとちるうるる君をぶふゆくもあ

ひとへふ物をそひてみ又今さ〜ふ

ふあ仮ふかふるて乳名ゆるを

をとくちぶくあるひ〜をたくうう

すてふぶてもゆぶるぶれぶ

ゆぶよ〜〜とあるホ人ふけてみるるめ

られさる文の仮ふよ〜〜ふとめて

あぶうめべ〜ゆる彼宗の伏案あり

釈 〜この侍従ハ紅のぐと

ゆ〜へあ〜て 王 むぐ〜のいふふ

君ハゆめるぐふう

評 此一段ハ上の系化の段れ結びふ

るゆふ数物の故を注歌〜るる

此段の仮をるるも法おかゆ系の

ものとゆる仮の安ものを初るべ〜

まて夕顔をこ系ふ君んとおりり

〜るふ変化の女をる人ものうとか

きるるうとめでいこの段ゆもるの

うちふんるひくるをこるもまま

若三君ゆひくるの数物のもうし

あをさとうるるやうふ〜れる

ふおのあやちちるくていちく

めぐ〜〜

かのるう仮ぶぐ〜〜 釈 あうし

院さそんうひ〜夏あゆふ夕顔ふ

ありける 受領 ぶ夢 いとぐゆ名のこちもしておし 若

君よおぐ 怖 うのみどもれすさぐ〜しきぐ中将 ウハキラレイ者 院の

ゆやと我 ニアラン 心ひよゆきるこの夕顔ノ宿 スグニ合ヒテ 下 ぶりくる

ふの西 の京れめれとのむすめ女 なりくる主 三人

うれふハあ乳母 ありく。たをハ別 ハ人なりくまぶ。

ゆひへぐて 資ハ なりさ行をきこををぬなゆけ

アとあ泣 れこひくり。 恋 なを迷 ケ ヒ ク ヒ ケ ヒ ク ヒ ケ ヒ ク ヒ

法ノ一変化の女は同じうそうそ見てゐる女のとうとうきまりてそれ
ぞれとなべて世間よりまてそれ
をもひとつふんをひとはなさて
法イヤーまひてみの法といふ法力
ふうてさる妖物も逃きるうをを
るかせてうそ多べ

さんは見いまうんさうふ 釈 妖物
の見へくといかとくう俗もの何ありて
法氏ハ太刀を抜ぬ
ひ一ふ不抜して夕刻に出ぬ
さ多ふ見あ

いのすけ 抜せ月のてく 釈 つて
ちに公の十日をひろくさして云ふ
評 この二段ハ美女を見わけてうもる
結構こかまてのかすけの外とに
ハ表ふくまをぜのひくえの年ひ
ちふりてのぬちきを
いざなりまてをうとあるハてのか
を陸てうあうんぬかべ

女房のうんうとて 新 女の往来ハ
ふかをを氏ハ女房をしてをうん
ハをてぬさ料の物をとをわもろ
ゆうんこ儀をうかけとい
とうを説ハ法とう別ハぬさ繁

さんぬ。 台月島
ふてるよこの法事ちのひくえの歌おれら
ようけうしー院あぐ。そひうしー女の。
さ物も形状おのーや様ノトホリニ ゆくえんくまバあれ
ふてうこそ同住ろにさみうんめのぬ奴物ぬれふんい
きうん準ソイデよウよ外負ぬくありぬることをおげー
いづるふも。やくしくあん伊手ケ
のけいちぬごろふぬぐる女房のくぐうんよ
とて上旬きむけんん殊にをさせ物ふまさうち
うちふもわぬぬとちのひくこまやうにをを
しささ物ぬ。あふぬぬ多ぬを帯

ぬさ女外房きぬぬぬをくとう
物るとおちくふぬをふも妻ーれ
をこふハすへてうむけとひとうを
さて女ハ男のくへこ女方への人ら
ふ者ーくをうう武女方の同ー
さ者ふる物物うのをとへをぬう
食せてちうるのふ 釈 ふむけを成
別の物物へといふ田住り強ふるふを
あーぬのとハ物抜外ふ物のぬさ
ふう外ふるう物て物物のをとれ
ふーあり

く扇 巴 物ハのくぬをを
ふくをあり扇ふあをとふあり
ぬぶまも行ーふるを
ぬさ 五 物成張をて物外ふも
向ふをふをを物ハの物ぬふ古来
ーふるあり 評 ぬさ繁帯ふふ
物物のを向ハ料ふをふをの絹をこ
まるに切ハ及の外ふを向ちしけふ
のこうちをもつふハ
細 ふののぬけををーうあり
評 物ハ手物のけをもをーくとぬ
むふあるふふぶこうちをを
て手扇ををのへをふる法を
いとめでふ

などいとわざとげ陸ーくふかのこうちをも
ぬさ 小袖
ぬさとう。 遣原
あふまでのうをみだうわとをんーたどよ
ひをすう神物ふちふをるれ。
ふをまやうある
ふをうもひをまどどうるををまバかーどを役
をまだうりけをるををををーう。
きみのちも手ちくんてるあつごうと
かんを成をても神ハなうををうわ。ねめんど。
あやしうんくうぬをづうをふてもふう
をれをぬるうかとをひつげ物ふをあど

あさそのころ　【美】さうともまふ
まもやとそれまでの形見とこそめ
しらさき衣の袖くるまでぬれぬ
のいろづくよりのりとよ
【釈】袖の形ふ衣の形ふるようを
地かりせうあるべし
こまやうふうすどもあまでこ
【玉】源氏ふめはみくよこ
ぬらすひハ　【湖】伊勢物語のおりてむ
きの袖いろりとる
せこのそもろ　【細】ものはけ衣の
衣ありの今ハ衣ありの衣ありとあ
【釈】蝉の羽れでこく薄ようし衣も
今ハ衣ありとあるとあるふ今
さ〜衣衣をとあるとあるふけても
君のゆんれりりとはまいせるるすもえべーさそぜめて
きばさすんにうのといふさこうまでハ衣の縁ふくハ袖の縁ふることハいふも見るり【新】十月衣の日ハあ
ねと今ハ衣ちくありてけの衣ふとハ衣れとハ
ろへと　【美】衣へどもいこ袖ふさ袖の涙し【釈】袖ふとハ衣の袖ふ袖ふ
ありとあれわかる
ぬめてこ〜ふハて
すだふ〜もろく　【細】ものろひよ一日ふをあめて日を袖ふ
アあるこ〜涙の面ハ九月ふる袖ふ
さ〜でハ衣のすをいつるうあ〜四分ハ十月ふあ
さてもくとを秋のくれやふひとせるるさて衣ハ色ふ

みるつ旦のわくるもちるくうちちぐれて。
立　著　時雨
ゆれそ〜ちまいとあそれなのみたなぐめ〜と
移ひとく。
係
すだふ〜もろふわるもふゆく
うとちぬ秋の袖れ。
地
移ろく〜ちれぬるハ
くるーうりきりとれがり〜ちりぬ〜う〜』
苦

のあるをといふさてそこふ見ふ見
えぞ袖ふるをふく袖きふくるふり
巧ふて俗情ふぎうあ見ふ
移ろくふちれぬふハろく
【湖】ふ俗のふもふ名いのふもこる
人ちるあくこと【釈】上の句俗と
ふ秋ふのふこ一つふちへて結びふる
袖ふ〜ろりとりとふり袖ふん
といふちふひの多くて若ちるすを
ふれふふくて袖ふふべーとはふり
俗ぐふるふふて袖ふ俗情ふあり
ふやうのこぐくしきふハ
【細】ふ名いのふ見ふ俗のふ袖ふ
ありはふ袖ふをびふふ秋ふこふひ
ふれどもとふ【湖】師ふやうのふハ
俗もあふふにちひて俗ふちひび
ふのひ〜ふ俗のふあいふり〜て
ふ袖ふしふぐりをふこふ〜【釈】袖へふ〜て花をふを止めふるをふいふふ
ふこぐどの袖ふあ〜ん〜ふ小
ふんん人ふ〜ふふあ〜び　【玉】源氏君のふるまふひをふ〜ふ〜ふふんふ〜ふふ〜ふ袖ふ
【釈】ふふあ〜ぐハまかふふ〜てふいふきこふそあ〜ふふふふをふ
ふふふ人ふのふ〜ふのふをふ　【釈】俗ふふのやふふいふふふ人ふふふふ〜ふふふふふふふふふふ
ちふ〜ふけ〜ふふといふきさ
あまふふのいふひさふふきふ〜ふふふふ　【釈】のふふふ
老のふふ人【地】んふもふくあびふふとふんん人さふふふふふふふふふふ

華文抄
かやうれふぐ〜しきふ年ハ。あおのぐちふかく
ろへちものびふ袖ふひ〜ものとふ〜ふれも
クシ　ヤウニ　イタハ　ク　皆　漏
ら〜とぐめふ〜ふふるをなどみふどのふふな
ふんん人ふ〜ふふふ袖ふふ
ら〜ふふふ。ふ袖ふ
がちふふる。ふふふふふふふふふふ

評かやうのくだくだしき事と上ふかく人をまどはすハとあるをうけくかまてられバ細流を流れ入るごとく源氏一部のぬるれ
新の事をとこしらとこ御ゐ一部をまでもこハ一部の凡例めいるまあるまバ幾よいるまてるごとく源氏一部のぬるれ
よふもなべてもてるすくそハ次の文よりふかく一部とあるを皆といふ詞ふてもうかまうりさてくこのすべて
れさハかやうのこハ源氏さのあるがちふかく一部ひくあまバくかくてくふ漏ー省きてふきを止めうしを
或人の凡くいふ事のゆるよされハとく侍ようん人まで世ふうるさすをかうてかてあるべて抜かめがち次
ちるとるで口きさの人行るさかくあるいふがの私あるれふあるまやさまバられハ源るまうけるる作るるるとやうよ
とうあるいふをまバをんてふてのとうあく花るるえされど俗ふ口さがあきを飛ハさうあもあく皆記芸の月と抜
凡ん人さるるふあるされよといふをあうこまを細流ふさ微月お源伝あるふ帝本巻の数源よいるるとれ首尾あ
べくいるまてるハまくとふさることふてかの小序ばるられた文を抜びいる跋文ひるとれめるさられバいるるーるとれ
まあるいあれかてのるいを毒くいふ尼ー先るの事本をふ光る源氏るくいるがるまれるるるまを事の世あもるれ人
てうびさるをやあるがさんとをのびるひるるかくうへすをさんうるうんんといるハるふかやうのくるるくしき
事ハおあがちふかくるさのびるひるるもいるくるくるといるうるあるうれひさるる
あれ和さうあるくといるるおれう低ー かまも世人のロさるあれと
將て抜びるうをいるさるハいるくを世をるでうるまあるるちるひるるるるふあるびるふをうれ事ハあるてきく
といひ又さるもあるあれをれれるる事つけのするくるるるる

嘉永六年癸丑新刻
鹿鳴草舍藏板